

翻訳通信

山岡洋一氏追悼号

目次

- | | | |
|-------------------------------------|----------------------------|----|
| ■ さらば、果敢に戦った友よ 山岡洋一追悼 | 芝山幹郎 | 1 |
| ■ 憂き世に残されて | 伊豆原弓 | 2 |
| ■ 山岡さんの思い出 | 安藤進 | 3 |
| ■ 山岡さんに言い残したこと | 酒井邦秀 | 4 |
| ■ 「先生」とは呼べなかったけれど
～恩師・山岡さんを悼む～ | 経済翻訳塾門下生 | 5 |
| ■ 翻訳と健康と <i>DictJuggler.net</i> | 武舎広幸 | 12 |
| ■ 翻訳訳語事典の用例収集 | 仁木めぐみ | 13 |
| ■ 生涯の誇り | 岩佐文夫 | 14 |
| ■ 山岡さんからの贈り物 | 有賀裕子 | 15 |
| ■ 山岡さんの思い出 | 長坂俊宏 | 16 |
| ■ 山岡洋一と古典新訳 | 水谷重秋 | 17 |
| ■ 無隣庵を照らした一条の光 | 若林暁子 | 18 |
| ■ 「カタツムリの歩み」を支えてくださった言葉 | 澤田由紀子 | 19 |
| ■ 不思議な遠縁 | 鈴木立哉 | 20 |
| ■ 山岡さん、いろいろお世話になりました | 井口耕二 | 21 |
| ■ 古典翻訳塾のこと——怒られてばかり | 古典翻訳塾塾生一同 | 22 |
| ■ 原語と訳語の一対一対応批判は翻訳教育の金字塔 | 榮坂透 | 24 |
| ■ 夏目漱石「現代日本の開化」と山岡洋一
——翻訳の未来に向けて | 安達貴教 | 25 |
| ■ 山岡先生追悼文 | 青山学院大学OB有志 | 26 |
| ■ 山岡先生を偲んで（寄せ書き） | 神戸女学院大学文学研究科
通訳・翻訳コース有志 | 27 |
| ■ 山岡先生の思い出 | 藤島京子 | 30 |

翻訳通信 山岡洋一氏追悼号

発行人 伊豆原 弓・井口耕二・河原清志・高遠裕子・永澤暖子 電子メール honyakut@u00.itscom.net

『翻訳通信』バックナンバー <http://www.honyaku-tsushin.net/>

さらば、果敢に戦った友よ 山岡洋一追悼

山岡洋一が逝ってしまった。

山岡洋一がいなくなってしまった。

認めるのがつらい。心に大きな穴が空いている。しばらくは埋められそうにない。

山岡さんとは中学生のころからの知り合いだった。高校も大学も一緒だったが、高校を出てからは20年近く交渉が途絶えていた。再会したときは40歳に近かった。私が翻訳した文庫本を山岡さんが偶然眼に止め、電話をかけてくれたのだった。

「同業なんだ」と彼はいった。当時は、産業翻訳の会社のエースだった。経営にもたずさわっていた。

「会社を辞めた」

2年ほど経って、山岡さんから電話があった。月曜日の昼間、飯を食べながら世間話をした。その日の夕方、私は文藝春秋の松浦伶さんに連絡を取った。老練な編集者の松浦さんはすぐさま山岡さんに会ってくれた。話はすんなりと運んだようだ。

当然だろう。山岡さんは、翻訳家として立つ力量を十二分に備えていた。文春から出た最初の訳書は『海に消えた怪物』という題のノンフィクションだったはずだ。緻密で正確で、速度のある翻訳だった。色気が足りないぞ、と私がいちゃもんをつけると、「そんな柄じゃない」と山岡さんは笑った。

1992年、彼はつづけて3冊の訳書を出した。溜め込んでいた力を一気に解き放つかのような仕事ぶりだった。松浦さんも舌を巻いていた。凄いな、と私が感心すると、山岡さんは照れた。松浦さんが亡くなったとき、山岡さんは美しい追悼文を書いている。

そこから先は怒濤の進撃だった。日本語で読んでも私にはむずかしい書物を、山岡さんはつぎつぎと訳していった。ボブ・ウッドワードも、レスター・サローも、アルヴィン・トフラーも、強い歯で噛み砕いた。さらにはアダム・スミスの『国富論』までも。なぜあんなに旺盛な仕事のできたのだろうか。

怪力だな、と私は感嘆した。ブルドーザーみたいだぞ、と呆れたこともある。背景には、経済学や金融情勢に対する深い知識と幅広い理解があった。

「こんなものを作りかけている」

といて、分厚いバインダーを見せてくれたこともある。なかを開くと、金融の用語がぎっしり詰まっていた。辞書には出ていないような、実践的な訳語ばかりだ。私はふたたび感心した。辞書にしちゃえよ、とそそのかすと、山岡さんはそのときもはにかんだ。「いずれね。ほかに考えもあるし」

その考えが壮大なスケールを伴うものであると知ったのは、少しあとになってからだ。

山岡さんは、厩大な量の翻訳をこなす一方で『翻訳通信』という印刷物を定期的に送り出すようになった。月1回の発行で、通巻は100号を超えた。

内容は多岐にわたった。翻訳とはなにか。名訳とはなにか。辞書とはなにか。古典とはなにか。

要するに、山岡さんは翻訳の急所に迫りつづけたのだ。横着で安易な仕事に怒りを叩きつける一方で、彼は翻訳の楽しさを謳った。日本語のこまやかさを贅え、翻訳と英文和訳の決定的な違いを喝破した。

しかも、彼には広い視野があった。思いつきや出来心で発言するのではなく、長い眼で将来を見据えていた。全体を構想する力もあった。つまり彼の身体には、歴史感覚が早くから備わっていたのだ。

戦闘的な反面、山岡さんは他者の仕事に惜しみない喝采を送った。いや、鼓舞したというほうが適切か。村上博基、小尾芙佐、上田公子、土屋政雄、仁平和夫、染田屋茂、小川高義、岸本佐知子。彼らの翻訳を山岡さんは熱心に支持した。私の仕事までも過分に評価してくれた。照れくさいが、うれしい励ましだった。物書きや翻訳家なんて、いくら強気を装っても、どこかで心細さを感じているものだ。村の鍛冶屋さながら、ひとりこつこつと、来る日も来る日も火玉を飛び散らせて刀を打つほかない。

だから、山岡さんのエールは支えになった。慰められ、勇気を与えられ、もう少し頑張ってみようという気にさせられた。

それにしても、と私は思う。山岡洋一のあの寛容さとフェアな精神はどこから来ていたのだろうか。

山岡洋一は、翻訳という仕事を心底真剣に考えていた。翻訳を見くびらず、翻訳を祭壇に祀り上げず、なおかつ思考と言葉に深い愛情をそそぎつづけた。

逆にいえば、山岡さんは無私の人だった。自己愛や自己憐憫といっためそめそした感情と無縁の男だった。だからこそ、彼を慕う後輩や若者の数はあんなに多かったのだろう。

嫉妬や意地悪が幅を利かせがちなこの島国で、山岡さんのような姿勢を取りつづけるのは、けっして容易な業ではない。だが、彼はその姿勢を崩さなかった。胸を張り、頭を上げ、果敢に戦って、大股で去っていった。私は、そんな山岡洋一を友人に持てたことを誇らしく思う。

山岡さん、会いたいよ。

憂き世に残されて

出会ったときの山岡さんはまだ四十前、通訳翻訳会社の翻訳部長だった。私は21歳の大学生で、ずっと翻訳をやりたくて転々と翻訳のアルバイトをしていたが、卒業を控えてそろそろ腰を据えて翻訳の仕事をしたかと思っていた。そんな時、友人が未経験の翻訳者を使ってくれる会社があると教えてくれたのだ。分野は経済・金融でまったくの専門外だが、なんでも勉強すればいいと思っていた。

一方、山岡さんは、あとで聞いた話によると、どうせ学生バイトだ、辞書の入力をさせて使い捨てればいいと思っていたそうだ。どこまで本当かはわからない。なにしろ最初に与えられた仕事は、辞書入力の間、ケインズかなにか経済学の古典を試訳することだったのだから。

山岡さんは凄まじいエネルギーをもった人だった。当時7、8人いた社内翻訳者の下訳すべてに手を入れながら、自分でも1日にA4で10枚以上の翻訳をこなし、さらに翻訳者の教育と自分の勉強を欠かさず、辞書をはじめ常に新しいことを模索していた。辞書、古典、翻訳者育成、思えばのちに山岡さんが心血をそそいだすべてのものが、当時すであった。

山岡さんの教育はきびしく、朝会社に行くと、まず日経新聞と日経金融新聞をちゃんと読んできたかテストされた。訳文を真っ黒に直され、分厚い資料を渡され、明日までに理解してこいと言われた。

それでも仕事は楽しくて、必要もないのに徹夜した。手に入るかぎりの資料をあさり、証券レポートや年次報告書、最先端の金融工学の記事も訳した。ただ、週末に遊ぼうなんて10年早いと言われたのには閉口した。金曜の夜になると、未チェックの訳文をどっさり山岡さんの机に置き逃げした。

山岡さんの隣の机には、いつも仁平和夫さんがいた。山岡さんよりひとつ年下の一番弟子だ。仁平さんの訳文も山岡さんはチェックするが、少ししか直さない。当時の山岡さんはカッとなるとすぐ大声を出すので若手はビクビクしていたが、仁平さんはへっちゃらだった。私たちが怒られるのを、いつもにやにや見ていた。たまに仁平さんがボカをして怒られると、新人たちはここぞとばかりにからかった。

山岡さんは、時々残業のあとにラーメンをおごってくれたが、飲み連れて行ってくれるのは仁平さんだった。飲みながら、将来どんな仕事をしたいか話した。仁平さんは、山岡さんと同じことをしているかぎり山岡さんを超えられないと言っていた。お

まえばどんな仕事をしたかだと聞かれて、大胆にも「100年残るものを訳したい」と答えた。ふたりとも夢があって、山岡さんの弟子で終わりたくないと思っていた。

山岡さんをはじめ皆が独立して別々の仕事をするようになったとき、私がIT分野に転向したのも、そんな仁平さんの言葉が耳に残っていたからかもしれない。それでも結局、訳書を出版できるようになったのは、山岡さんの力添えがあったからだ。産業翻訳を始めたときと同じく、出版翻訳のいろはも山岡さんから教わった。

山岡さんは、育てた弟子をいつまでも大事に守ろうと道を作ってくれた。でも、なんとか独り立ちしようと思っていた私は、あえて山岡さんが指し示すのと違う方向へ進むこともあった。山岡さんには、なぜという思いがあっただろう。

その一方で、自分が最後に抛り所になっているのは山岡さんだという自覚もあった。私の翻訳者としてのバックボーンは山岡さんに作られた。思うまま仕事をしていられるのも、いざとなれば山岡さんが助けてくれるという考えが頭の片隅にあるからだ。そんな自分の都合のよさに呆れもした。

そうして恩返しのひとつもしないうちに、仁平さんも山岡さんも、突然この世を去ってしまった。残された自分が果たすべき役割はなんだろう、と迷う。

人はさまざまな知識や思念を抱えて生きている。あらゆる人が頭の中にあるものをすべて言葉に変えて他人に伝えることができれば、世界はどれほど速く進歩するだろうと思ったこともある。しかし、そんなことは起こらない。言葉にできることは限られているし、一度表に出た言葉は本来の思いとは違った方向へ歩き出す。人は頭の中に膨大な宝物を抱えたまま消えてしまう。消えた思念は宙をさまよい、生きた人間には捉えられない。

山岡さんは人一倍多くのものを内に持っていた。それを言葉に変える能力も持っていたから、多くのことを伝え、多くの人に影響を与えた。それでも、語られなかったことの方がはるかに多いはずだ。まだまだあったはずの宝物を、山岡さんは持っていつてしまった。

残された者のなすべきことは、消えた断片を探すことだろうか。それとも、自分だけの宝物を育てることだろうか。そんなことをいま考えている。

最後の会話

2011年8月の初めごろ、『アインシュタイン その生涯と宇宙』下巻が欠陥翻訳だとして回収されるという事件について「友人が出しているミニコミ誌にこの件で記事を書くよう依頼されて、四苦八苦しています」と電話で聞いたのが、わたしにとって最後の会話になってしまいました。

毎月、『翻訳通信』が発行されると、電話で簡単な感想を伝えたり、近況を語り合ったりしていましたが、いまは、その声が聞こえなくなり、さびしいかぎりです。

『翻訳通信』との出会い

記憶をたどると、『翻訳通信』を知ったのは、1994年の春ごろ、石原達也先生から山岡洋一という面白い男が翻訳に関するミニコミ誌を発行しているというお話を伺ったのがきっかけでした。

いま、手元の1994年6月号をばらばらと眺めると、伊豆原弓さんや仁平和夫さんが寄稿されています。特に、伊豆原さんの「ワープロかパソコンか」、その翌年に寄稿されていた「パソコンの周辺機器」や「NIFTY-Serve からインターネットへの接続」など、懐かしく読み返しました。

山岡さんの連載に対するわたしからのコメントもいくつか記載されています。この連載の内容は、『翻訳とは何かー職業としての翻訳』（日外アソシエーツ2001年）、『あぶない英単語の常識』（ちくま新書2002年）にまとめられています。

勉強会に参加する

その後、山岡さんの勉強会に出席させてもらうようになりました。頻繁に顔を合わせて、いろいろお話を伺う機会が増えました。そんな折、用例データベースをインターネットで公開したいという話が出ました。

ちょうどその折、わたしの研究所時代の仲間と久しぶりに会う機会があり、この話をしたところ、仲間のひとりが検索システムを作ってくれることになり、わたしが非常勤講師をしていた多摩美術大学の石田晴久先生に相談したところ、同大学のサーバーを無償で貸していただけることになりました。

用例データをインターネットで公開する

1998年の秋ごろ、山岡さん、伊豆原さん、落谷さん、とわたしの4人で、多摩美大に集まりました。山岡さんが収集された用例データと落谷さんが Perl で作成された検索システムを移植する作業は夜遅くまでかかり、帰途は土砂降りになりました。

なお、石田晴久先生とは、わたしの翻訳書『プロ

グラミングの壺』（共立出版）で監訳をしていただいたのが機縁で、多摩美術大学で英語の非常勤講師として招かれ、以後10年近くお世話になりましたが、2009年3月に他界されました。

多摩美大の用例検索サイトは、好評で、特に海外からも多くのアクセスがあり、時折、ダウンして、ばたばたと対策に追われたものでした。なお、この用例検索サイトは、わたしの退任に伴い、2007年3月で終了し、現在は、武舎広幸氏のサイトで「翻訳訳語辞典」として公開されています。

(<http://www.dictjuggler.net/search/>)

国富論の翻訳研究会

国富論の研究会では、ひとつひとつの単語について、数点の既訳と山岡さんの訳訳を並べて、問題点を検討しました。たとえば「save-all」について、山岡さんは次のように述べていました。

「save-all」は、大内・松川訳にかぎらず、既訳のすべてで「廃物利用」と訳されています。この訳語を踏襲したのは、たとえば英英辞典の語義を読むと、「廃物利用策」は、この語義にはほぼぴったりの訳語だし、文脈にもよくあうように思いますがどうでしょう。これ以外の表現を使うとすると、たとえば「無駄をなくす方法」とか「節約のため」とかになるでしょうか。

この個所の原文と訳文は、次のとおりです。

The business of the dairy, like the feeding of hogs and poultry, is originally carried on as a *save-all*.

酪農も豚や家禽の飼育と同様に、当初は廃物利用策として行われていた。

『国富論』（上）（日本経済新聞出版社）247頁
山岡翻訳理論の具現化

この「save-all」は文脈から「あまったものを捨てるのはもったいないから無駄にしないで有効に活用する」具体的には「チーズやバターなどの形にして保存する」といった意味合いで使われていることがわかります。意味はわかっても、古典の翻訳表現として定着させるのは大変です。

山岡さんは、とりあえず訳し終えた部分を100部ほど私費出版して多くの人に意見を求めました。その熱意には、いまでも脱帽するばかりです。

まさに『国富論』は、山岡さんが日ごろから提唱されていた翻訳理論を具現化したものだと言えます。最近では若い人の教育にも熱心に取り組んでいましたが、志半ばで大変惜しい人を亡くしました。

合掌

(2012年1月7日記)

山岡さんに言い残したこと

山岡さんはいきなりいなくなってしまったが、山岡さんと議論しておきたいことはいくつもあった。人を評するのに「古武士のようだ」という cliché があるけれども、陳腐だろうと腐陳だろうと、山岡さんほどこの形容が合う人をわたしは知らない。そして山岡さんほどの武士であれば、幽冥境を異にしていようとも真剣を切り結ぶはずだと思う。

山岡さんとわたしは日本の翻訳をなんとかまともにしたいという一点で揺るぎなく一致していたけれども、その他の点ではずいぶんと違うところもあった。もちろん緻密さも構想力も実行力も後進育成も、わたしなど束になってかかっても山岡さんの敵ではなかったが、勉強会などではわたしの意見をまともに受け止めてくださって、時として熱い議論になった。

たとえばわたしは多読三原則ということ掲げ、学習者は辞書を使ってはいけない、辞書は翻訳者と研究者だけが使う物だという意見で、山岡さんは「それはわたしの嫌いなダイレクト・メソッドですか！」と絶句なされたことがあった。山岡さんもわたしも、翻訳は原作者が日本語で書いたらこう書いたはずだという文章でなければいけないという点で一致していたと思っているけれども、そこへ行くまでの過程で、山岡さんは日本語を使うことを可とされ、わたしは途中の過程に日本語を容れることを肯んじないところが違っていた。このことはもう何年間もわたしの頭を離れたことがなく、そのうち山岡さんと正面から議論する機会があるだろうと漠然と期待していた。もっともっと鏝迫り合いをして、互いの剣を磨きたかった。

また、山岡さんはわたしが翻訳家を十把一絡げに非難することに眉を顰めておられた。たとえばわたしはある翻訳家をたしかに手練れだと思うけれども、手練れ故の手抜きを見つけてしまう。そこで『さよなら英文法！』でも採り上げた。けれども山岡さんはその人のことを「悪く言わないでほしい」とわたしに言った。山岡さんはまた、その人の翻訳を「日本語になっているのに一語も省いていない」と激賞していた。十把一絡げはたしかによくないと、今は思う。山岡さんの評価する作品と一緒に逐一議論したかった。

山岡さんとわたしは文章を評価する時の軸がそもそも異なっていると感じたことがあった。山岡さんはご自分の翻訳の糧とするために翻訳と原文を並べ

て細かく比較されたい。わたしにはそれなども「正しい訳、間違った訳」という軸の顛れと思える。わたしが翻訳で目指すところがあるとしたら、それは「正しい」訳ではなく、読んだ時のリズムや語り口をそのまま写したいということだろうと思う。これもまたじっくり、おそらくは温泉合宿でもして切り結ぶべき論点だったろう。

山岡さんはまだまだたくさん仕事をなさるはずだった。日本の翻訳をすっかり変えてしまう大きな仕事をなさるはずだった。わたしもそれは必要な仕事だと思っていたが、「わたしにはできない、できるとすれば山岡さんしかいない」と思っていた。翻訳の世界に埋めようのない大きな穴が空いてしまった。

「先生」とは呼べなかったけれど ～恩師・山岡さんを悼む～

中小路佳代子（翻訳者）

このたびの『翻訳通信』山岡さん追悼号の原稿募集のお知らせを受け取り、どうしたものかと逡巡していたところ、山岡さんのお通夜で十数年ぶりに再会した貫井さんから同じような気持ちでいらっしゃるというメールをいただき、翻訳塾の仲間で合同の寄稿をしては、という話になった。連絡のついた7名からご賛同を得たので、一人ずつ順に山岡さんへの思いや思い出などを綴らせていただく。

山岡さんとの出会いは1997年。私は翻訳の通信添削コースを終了後、育児をしながら細々とリーディングの仕事などをしていた。ある日、翻訳学習者向け月刊誌で山岡さんが、金融辞書をつくるためのデータ収集スタッフを募集していた。条件は「PCで1日2～3時間程度の作業ができて、月に1、2回、川崎市内の事務所まで来られる方」ということ。2歳児と0歳児がいてもこれならできるかな、と応募し、トライアル後、はじめて山岡さんの事務所に伺った日のことは、今もよくおぼえている。

2週間に1度、作業をしたデータをフロッピーに落として山岡さんの事務所に持って行く。データを山岡さんのPCに落とす作業はすぐに終わる。だがその後、必ず宅配のピザを食べながら3～4時間、翻訳についてのいろいろなお話を聞いた。たしか初回のときにもう山岡さんから、「せっかくこうして集まるのだから翻訳の勉強会をしてはどうか」という提案がされ、翻訳塾の前身がスタートしたと思う。全員が同じ課題を訳し、それを比較して議論するというもの。毎回、山岡さんの事務所に伺うたびに、目からいくつも鱗が落ちるような思いをした。

ほどなく、山岡さんは翻訳学校の生徒さんなどを誘い、総勢20数名のメンバーで本格的に翻訳塾（のちに「経済翻訳塾」に名称変更）をスタートさせた。目的は「経済を中心とするノンフィクション出版翻訳の分野で、優秀な翻訳者を探し出すことにある。つまり、この分野の出版翻訳を目指している人たちに、競争の場とオーディションの機会を提供すること」であった。月に2回、金曜日にメールで課題が送られてくる。各自が翻訳して火曜日までに山岡さんに送る。すると、1日以内に山岡さんから成績一覧と模範訳、講評が送られてきた。5段階評価だが、5

（出版翻訳としてはほぼ通用する）はつかないことがほとんどで、優秀訳として選ばれる人もたいていは4（出版翻訳の下訳として通用する）か4+だった。2（英文の解釈としての問題はそれほど多くないが、日本語の文章として通用しない）が2回続くと退会。4回連続で不参加でも退会。厳しいルールだった。

5は望むべくもないがせめて4をもらえるようにと、毎回、わずかなミスもないように、そして少しでもよい訳に練り上げるために、かなりの時間をかけて翻訳したものだ。このときほど一言一句を丁寧に訳したことはおそらくない。この経験が今でも本当に役に立っている。それでもなかなか良い成績はもらえなかったが、珍しく4がついたり講評の中でほめてもらえたりしたときは、それはそれは嬉しかった。

毎回全員の訳文を読み、講評を書き、その後のメールでの議論にもときどきコメントくださった山岡さんだったが、これはもちろんすべて無償。優秀な翻訳者を育てたいという思いで、お忙しい中、多くの時間も、月に1回の翻訳塾メンバーによる懇談会の場も惜しみなく提供してくださったのである。

翻訳というものに対してまっすぐで厳しい方だった。山岡さんのところに通っていた数年間に、翻訳とは何かを、そしてプロとしての心構えのようなものをたくさん学ばせていただいた。翻訳を志してすぐのころに山岡さんから直接学べたことは、私の大きな財産となっている。訳書を出すたび、これも山岡さんのおかげ、と感謝して本を送らせていただいた。私は山岡さんの教え子としてはまったくの未熟者だが、私にとっては感謝してもしきれない大恩人だ。お会いしたばかりのころ、「5年本気でがんばれば、きっとよい翻訳者になれると思うから」と言っていたのがどれほど励みになったことか。「まだまだ若いからな。30代後半ぐらいにならないといい翻訳はできないよ」と言われて、年をとるのが楽しみになった。考えてみると、あの頃の山岡さんは、今の私とたいして変わらない年齢でいらした。その年齢になった自分は？と恥ずかしく思う。

仕事にはとても厳しいが、シャイで優しい方だった。甘いものが好きで、ピザのお礼にお菓子をお持ちすると、とてもうれしそうに召しあがっておら

れた。1999年刊の『ビッグディール』（ブルース・ワッサー・スタイン著、日経BP社）を下訳させていた際、納品前日に遅くまで事務所で作業していたとき、他の方はまだ作業中だったが、川崎から熊谷まで帰る私を心配してくださり、駅まで車で送ってくださったことがあった。「車は前に動けばいい」とおっしゃって、なんともほほえましかった。

思い出は尽きない。感謝も尽きない。でも、ご無沙汰が続いて、そのうちにまたお目にかかる機会をつくりたいなあと思っているうちに、山岡さんは天国に逝ってしまわれた。今、お通夜で昔の仲間十数年ぶりに再会できたのも、さらに皆さんと合同でこうして寄稿できているのも、山岡さんのお計らいのように思っている。いつも翻訳者や編集者の交流の場をつくってくださった山岡さんだったから……。これからも山岡さんに恥じない仕事をしていかなくは、と思うと同時に、この縁も大切にしていきたいと思っている。

道田豪（翻訳者）

なんと挑戦しても評点5はもらえない。それどころか毎回の訳文に何らかの欠陥があることを厳しく指摘される。

山岡さんが主宰された「経済翻訳塾」や『ビッグディール』の下訳作業でのこうした経験は、わたしのなかにある種の固定観念を植え付けたように思います。それは「自分は翻訳者としてきわめて未熟である」という自覚です。この意識は、10数年にわたって産業翻訳の仕事が続けてきたいまも変わらずあります。

ただ、もしも、この間にわたしの翻訳の質がこうじて低下することなく、発注者の要求にある程度こたえられているとしたら、それはこの「自分は未熟である」という自覚があったおかげだとも思うのです。未熟であればこそ、仕事には最大限の注意を払い、その評価には常に厳しい態度をとろうとしてきました。

自分を未熟であると思えるのは、もちろん山岡さんが妥協のないプロの翻訳者としての高い水準を示してくれて、10数年たった今でも、それが常に自分のなかの物差しとして機能しつづけているからです。

とはいえ「自分は未熟である」という思いに始終

とらわれて仕事を続けるのは、怠け者のわたしにはけっこうしんどいことでもあります。どこまでいっても、山岡さんの鋭い批評眼を意識すると、これで完璧であるとは決して思えないのですから。完璧になるように努力すればいいだけの話なのですが、毎日の仕事をただ忙しくこなしていくうちに、適当なところで自分に妥協するクセもついてきました。

そうした日々が続くうち、自分が成長していると感じられなくなる。山岡さんが示したような高い水準を実現するだけの才能は、自分にはないのではないかと考えるようにもなりました。そんな無理なことに神経を使わなくても、こうして継続的に仕事をいただいているのだから、それでいいのではないかと。

ちょっときれいごと聞こえるかもしれませんが、山岡さんの訃報はそうした自分を見つめ直すきっかけになりました。告別式に参加したときの様子、そこに展示されていた山岡さんの労作の数々、関係者の方々の追悼の言葉、それらに触れ、これまでの自分の仕事に対する態度を顧みるうちに、心のなかにある思いがわき上がってくるのを感じました。

山岡さんが高く評価されている土屋政雄さん訳の『日の名残り』（カズオ・イシグロ著）のなかにも、品格ある執事とはなにかをめぐって主人公が同僚と議論する場面があり、そこにこんな一節があります。

「たしかに、執事の大半は、いろいろやってみても、結局、自分は駄目だったと悟らざるをえないのかもしれませんが、それはそれとして、生涯かけて品格を追求することは、決して無意味だとは思われません。すでにそれを持っている偉大な執事、たとえばミスター・マーシャルにしても、長年にわたる自己啓発と経験の注意深い積み重ねで、それを身につけていったに違いないのです」（ハヤカワ epi 文庫、p48～49）

「品格ある執事」を、「一人前の翻訳者」「プロとして認められる翻訳者」に置き換えて、時間はどれだけかかっても、それを精いっぱい追求すればいいのではないかと思えるようになったのは、山岡さんの告別式に参加してしばらく経ってからでした。

山岡さんは、翻訳の技量をあげるための方法も、そのために参考にすべき翻訳書も、惜しみなく示してくれています。未熟な自分は、それを道標にどこまでも歩きつづけよう。そう思うことができたとき、

わたしはとても清々しい気分になれたのでした。

ただひとつ悲しくも残念なのは、目標としての評点5をくれる人がもうこの世にいらなくなってしまったことです。

飯村育子（翻訳者）

今思えば、翻訳の世界に飛び込んだばかりのころに山岡さんの経済翻訳塾に参加できたのは本当に幸運だった。山岡さんの熱意あふれるご指導、高い志を持つ仲間たちとの切磋琢磨……大いに刺激を受け、得がたい経験となった。翻訳塾の課題に取り組むとき、月に1度の懇談会のために山岡さんの事務所向かうときのあの緊張感は忘れられない。ある日の懇談会で「私はいわゆる名作文学をほとんど読んだことがないのですが、今からでも読んだ方がいいですか？」と尋ねた際に「……読んだ方がいいよ」とおっしゃったときのすっかり呆れ果てたご様子もよく覚えている。まずは時代小説を読んでもらうことを勧めて下さったので、父の書棚にあった「真田太平記」を夢中で読んだ。通勤電車で読みふけて何度乗り過ごしたことか。

翻訳塾の終了後も引き続きご指導を受けた。当時の私は金融情報サービス会社の社内翻訳者として働いていたが、個人の翻訳者としての初めての仕事も、表紙に自分の名前が載った唯一の訳書も、その後の私の仕事の中心である金融機関の調査レポートの初案件も、すべて山岡さんのご紹介だった。金融機関の調査レポートは隔週で担当した。訳文をファクスで送ると、山岡さんが修正を入れてファクスで返して下さい。ほどなくして電話が鳴るのだが、この電話、30分は覚悟しなければならない。と言っても、訳文に関する話は最初の数分。そのあとはよもやま話である。お話好きの山岡さんは海外にいらしたときのことなどを語って下さった。楽しいひとときだった。

この調査レポートの翻訳は、山岡さんのご指導を定期的に受けることのできる大変ありがたく貴重な仕事だったが、私が別の金融機関に転職したために1年ほどで辞めることになり、本当に残念だった。その後、私は再度の転職を経てフリーの翻訳者となった。専門は経済・金融。中でも金融機関の調査レポートである。

そうした中で山岡さんとは徐々に疎遠になってい

ってしまったのだが、一昨年の夏、「翻訳通信」100号記念セミナーが開催されると知り、参加することにした。およそ10年ぶりにお会いした山岡さんはあの頃より少し痩せられた気がした。すっかりご無沙汰していたので躊躇したが、思い切ってご挨拶に伺った。そのときに山岡さんが発した一言「年取っちゃって……」には少し（いや大いに）ショックを受けた（その一方でお変わりない「毒舌ぶり」が嬉しくもあった）。確かに10年前の私は30そこそこの小娘で翻訳者としては若い部類に入り、山岡さんにもかわいがって頂いた。当日は自分なりに精一杯着飾って行ったつもりだったが、山岡さんの目はごまかせなかったようだ。

なんだか居心地が悪くなった私は「細々と翻訳を続けています」と告げるだけでそそくさと退散してしまった。思わぬ不意打ちに面食らったというものもあるが、それだけではない。自分の力が足りず、出版翻訳の分野で山岡さんのご期待にまったく応えられなかったことにずっと負い目を感じていたからだ。でも胸を張ってこう言えばよかった。「落ちこぼれでしたが、おかげさまでその後も翻訳の仕事を続けています。山岡さんが手ほどきをして下さった金融機関の調査レポートが仕事の柱です。フリーになって8年になりますが、複数の取引先から定期的に依頼を受けています。これもひとえに山岡さんのおかげです。本当にありがとうございました」と。感謝の気持ちをきちんと伝えたかった。だがそれももう叶わない。心からご冥福をお祈りしたい。

相変わらず文章を読むのも書くのも苦手な私がこれまで翻訳の仕事をしてこられたのも、翻訳者としてのスタートを切った時期に山岡さんに翻訳の面白さや奥深さ、難しさや厳しさを教えて頂いたからだと思う。金融機関の調査レポートばかり訳してきたのも、隔週でご指導を受けていた頃にお褒めの言葉を頂き、「この分野でやっていこう」と思ったからだ。いまあらためて思う。山岡さんに教えて頂いたことを生かしているだろうか。あの頃から少しは成長したのだろうか。せめてもっと本を読もう。

田中志ほり（翻訳者）

山岡さんに初めてお会いしたのは1995年だった。金融機関に勤めていたが、職業の選択が間違っていたような気がして退職し、翻訳学校で山岡さんの経済翻訳の授業をとったのがきっかけだ。それまでの仕事で英語の資料から情報を抜粋して日本語の資料

を作ったことはあったが、文章そのものを日本語に書き換えた経験はほとんどなかった。資料作りと違って、よくわからない部分はお茶を濁すという奥の手が使えないので四苦八苦した。

しばらくして山岡さんが経済・金融英和辞典の用例収集をしないかと声をかけてくださった。自宅で用例を拾って入力し、ある程度たまったところで山岡さんの事務所まで持って行く。事務所には翻訳を志す人、編集者、英語教育に携わる人などさまざまな人が来ていた。当時の私にはわからなかったが、日本の翻訳全体の質、さらには日本語そのものの質をなんとかして高めようという山岡さんの情熱に惹かれて集まる人たちだったのだろう。

その後、山岡さんの紹介で出版翻訳に携わったり、山岡さんが始めた翻訳塾に参加したりすることができた。翻訳塾では山岡さんに怒られないようにと鈍い頭を必死に働かせて訳文を作ったが、毎回わからない箇所が残った。いつもびくびくしながら課題を提出した。

山岡さんには翻訳という仕事について何から何まで教えていただいたが、特に印象に残っている教えがある。すべての情報は原文にあると考えて、原文を深く読みこめというものだ。英語を読んで少し考えてわからないと、すぐに調べて解決しようとしがちな私にとって、今でもありがたいまじめになっている。

山岡さんは翻訳者の発掘や地位向上にも熱心だった。翻訳学校で教えたり、翻訳塾を主宰したりするのは、優秀な翻訳者を育成することは可能なのか、翻訳は人に教えられるものなのかを検証するためでもあるとおっしゃっていた。また翻訳は蛸壺産業で、みんな自分以外にどこでどんな人がどんな翻訳をしているのか知らずにこもって仕事をしているから、翻訳者は地位が低く、立場も弱く、新人も参入しにくいと力説していらっしゃった。そういう思いがあったから、折に触れて翻訳者が同業者や業界の人たちと交流する機会をつくってくださっていたのだ。

口がうまい方ではなかったと思うが、電話をしたり、事務所にかがったりすると、必ず自分の思うところを熱心に聞かせてくださった。愚痴のような形で始まることが多いが決して愚痴では終わらず、不満な現状をどう改善すればいいかをつねに考えて、着実に実行していた。そしてそれは山岡さんご本人

の利益には関係なく、翻訳界や出版界や文化などもっと大きな視点に立ったものだった。ご自分の仕事を精力的にこなしながら、まめに私たち後進の面倒も見て、いったいどこにそんな時間とエネルギーがあったのだろう。

こう書いていくと、偉すぎて近寄りがたい人物のように思えるので、少し軌道修正したい。雑談しているときの山岡さんは、噂好き、世話好き、甘いもの好きの親しみやすいおばさん（失礼）のようだった。独身者に向かって、翻訳業は孤独だから結婚した方がいい、だれかいのかとたずねたり、私が結婚することを知らせたら、本名が田中から畑中に変わることを面白がって人に広めたりしていた。

細々とではあるが、今私が翻訳を生業としているのは、山岡さんがいらっしゃったからに他ならない。翻訳の心構えや技術を示し、編集者を紹介して下さっただけでなく、仕事上でぶつかる些末な問題（産休中に仕事を代わってくれる人はいないか、乳飲み子の面倒をみながら働かざるをえなくなったので締め切りのない仕事が欲しい、などなど）にまで親身に対応して下さった。失礼ながら、私にとって、何かあったときの駆け込み寺のような存在だった。

何のお礼もできないまま、何のお返しもできないまま、こんなに突然逝ってしまうなんて、今でも信じられない。

そろそろ独り立ちしなければだめだよと山岡さんがおっしゃっているような気がする。身をもって教えてくださったことを日々の仕事の中で少しは実践できているか、時々確かめつつ仕事をしていこう。そして山岡さんがしていらっしゃったように、自分のことだけではなく、もっと広い世界を視野に入れて行動できる人間になりたい。

佐藤智子（翻訳者）

私は翻訳塾に参加する前から翻訳会社に登録して、主に経済分野の英日翻訳にかかわっていました。とはいえ、他の翻訳者とのつながりはなく、翻訳業界の現状や動向もわからず、暗中模索の感がありました。そんなころ、たしか翻訳雑誌だったと思うのですが、「翻訳塾の要綱」が目にとまりました。読むと厳しそうで、はたして参加する資格があるのだろうか、申し込むまでにずいぶん迷ったように記憶しています。お恥ずかしいことに、山岡洋一という人を

それまでよく知りませんでした。

結局、参加を決めたのは、自分なりに行き詰まりを感じていて、どこかに活路を見いだしたいという気持ちが強かったからだと思います。翻訳塾の仕組みについては中小路さんが書かれています。月 2 回の課題を毎回四苦八苦して訳して山岡さんに送り、成績一覧と講評のメールが送られてくると、それを見るのにどれほど緊張したことか。結果に一喜一憂、いえ、「一喜二憂」だったかもしれません。それまでも何年か翻訳料をもらって仕事をしてきたはずなのに、そんな上っ面の経験がぐらぐらと崩れていくように思えたこともたびたびありました。

それでも、山岡さんの事務所での懇談会に呼んでいただき、『ビッグディール』の翻訳チームに入れていただきました。翻訳塾（メール）をとおして知りうる山岡さんの印象は「厳格」そのもので、おそろおそろ初めて事務所を訪ねました。しかし実際に会って話してみると、翻訳についてはもちろん厳しいのですが、人柄の温かさや大きさを感じもしました。「翻訳というのは語学の仕事ではない。物書きの仕事だ」——私にとって衝撃的な言葉でした。それは、日本語で執筆する仕事だという自覚が私に欠けていたからにはほかなりませんが…。日本語に対する私の意識はこのときから変わったと思います。また、古典翻訳の「夢」は当時から語っておられました。「いま」の問題を扱うことが多い経済の翻訳者にとどまらない壮大な挑戦への気概と、人間としての奥深さを感じたものです。

大著『ビッグディール』の翻訳に際しては、全 22 章のうち 4 章を担当させていただきました。いずれも合併・買収の実務に関する章で、原文の理解に苦しみながらやっと訳稿を仕上げたらメールで送ると、山岡さんはそれに手書きで直しを入れられ、ファクスで戻されました。こちらはそれを読みながら訳文を修正。そんな作業を何度か重ねながら、出版に耐えうる日本語とはどういうものかを教わりました。考えてみれば、ご自分で訳されたほうが速いかも知れず、なんという手間隙をかけてもらったことかと、いまさらながらに思います。

2000 年以降はお会いする機会もなく、昨年 8 月、突然の訃報に接しました。私が山岡さんから直接学んだのは 2 年くらいでしたが、そこで学んだことは間違いなく私の根っこになっています。そして、翻訳の仕事が今日まで続けてきました。

山岡さんが亡くなられてから、『翻訳とは何か—職業としての翻訳』（日外アソシエーツ、2001 年）を読み返しました。この本を読んでいると、山岡さんの声が聞こえてくるようです。そのなかに、「翻訳の秘訣、それは完成度の高い日本語で書くようにつとめることである」と書かれています。これが大原則であり、翻訳のノウハウを説明した本を読む必要すらないと。ゴールなき目標とも思えますが、この「秘訣」を肝に銘じて、翻訳に限らず日本語を大事にしていこうと思います。

西田直子（通訳・翻訳者）

久しぶりの山岡さんからのメールの件名をみて目を疑った。ほんの数か月前に十数年ぶりにお会いしたばかりだった。これからまたご指導を仰ぎたいと思っていた矢先の、あまりにも突然のことだった。

直接お目にかかったのは十回にもみたくない。1 年間の翻訳塾参加と『ビッグディール』の下訳という接点しかない。それでも訃報に衝撃を受け動揺する、それほど山岡さんから与えられたものは大きかった。

翻訳塾は 1998 年というブログやソーシャルメディアのない「パソコン通信」時代に、電子メールで塾を主催する斬新な企画だった。それが密度の濃い研鑽の場として機能していた。2、3 人の優秀訳に対して参加者がコメントをやりとりする。山岡さんは模範訳や回答を示すことはせず、参加者が自分で考えることを強られる仕組みになっていた。文章の解釈で議論が迷走したりすると、山岡さんの的確な軌道修正が入った。

誤訳に対しても、どうして間違えるのか、どうしてわからないのか、と真剣に追及された。訳文にいたるまでのプロセスを重視し、機械的に訳語をあてはめるのではなく、一字一句ゆるがせにしないで考えるという姿勢が貫かれていた。どうすれば優れた翻訳ができるのかをひたすら追い求める姿は求道者のようだった。

翻訳の新しい可能性も常に探究されていた。山岡さん自身がいわゆる翻訳調ではない翻訳を主流にする大きな流れの変化を生み出したが、最後にお会いした時は、通訳が本業である私に、「同時通訳の技法を生かして、今までと全く違うスタイルの翻訳ができないだろうか」と投げかけてこられた。

また「スターのような翻訳者に出てきてほしい」とも。翻訳塾の講評でも「スターが出てこない」と翻訳は良くならないとその人はいう。これにはまったく同感だ。スターが出てきてほしい、マンモスのようなスターが。」と同じことを書かれている。

『市場対国家』など大著の翻訳と並行して、名訳と原文を対照して膨大な量の用例収集を続け、翻訳通信を執筆し、翻訳塾を主催し、と並外れたエネルギーと翻訳にかける情熱に今更ながら圧倒されるばかりだ。山岡さんこそスターだった。大きな星が落ちてしまった。その星が輝いていたとき、わずかな期間ではあったが薫陶を受けることができたことを今後の励みとしていきたい。

吉村敦子（翻訳者、学生）

1991年の終わり。山岡さんの金融翻訳の短期クラスを受講した。セイモア・ハーシュの『サムソン・オプション』を出される前だったと思う。独立前で大量のお仕事を抱えておられるご様子の中、宿題の訳文は毎回、律儀なほどピシリ朱入れされて返ってきた。超ご多忙でも睡眠時間はあまり削っていないとのこと。その代わり、食事や入浴にかける時間は短し、お酒も飲まないからと。

クラス閉講後、山岡さんの事務所（仕事部屋）の開設を祝って渋谷でお祝い会を開いた。祝う生徒たちはアルコールも入って陽気に盛り上がっていたが、祝われる山岡さんはウーロン茶を飲んでいらして、なんだか申し訳なかった。

1993年に『デス・オブ・マネー』が出版され、1994年、事務局をしていた「金融と環境研究会」（NGOの勉強会）の講師にお招きしたい、とお電話させて頂いたことがある。山岡さんには、翻訳論や翻訳・英語教育、金融・経済はもちろん、天下国家も論じてもらいたい。当時からそういう思いがあった。

1991年の飲み会の口実にした鷺沼の仕事部屋には、1998年だったか、経済翻訳塾の懇談会で初めておじゃまさせて頂くことになった。第二期から第四期まで参加させて頂いたが、経済翻訳塾は毎日が真剣勝負。寄らば斬る！くらいの勢いで原文を読み、訳文を練り上げる。仕事よりも気合入れています。みなさん、そうおっしゃっておられた。毎回、段ボールひと箱分の関連書籍を読みながらコメント書いています。そういう話も聞いた。

これだけみんなが気合を入れて訳文を送っても、講評で開口一番、お叱りを受けることもあった。一番印象に残っているコメントは「答えはすべて原文にある」。経済翻訳塾のログが残っていないのが残念だが、森嶋外の翻訳論などが、経済翻訳塾のコメントのやりとりの中で引用されたり、原文の解釈の違いをめぐって、オンライン上で議論がなされるなど、密度の濃いやりとりが展開されたりもした。

経済翻訳塾の途中から用例集のお手伝いにも細々と加わり、つくばから時折、事務所に通った時期があった。四方山話でLTCMの破たんや、クリントンの不倫事件が話題に出たと思うので、1998年から1999年頃だったか。やがて、その用例集の作業も終わりとなり、山岡さんが、最後に参加メンバーにお昼をご馳走してくださった。丘の上のイタリアン・レストランだったと思う。食後、娘（当時3歳）に、ご自分の分と一緒に、アイスクリームを注文して下さったのを覚えている。

それ以降、介護に追われる数年間もあり、ずいぶんど無沙汰していた。目にもとまらぬ速さでリーダーズを引く姿、出版翻訳の合間に、証券会社からの至急依頼の翻訳を飛ぶように訳して送り返す姿、翻訳の巨人でありながら細部に宿る神にこだわりながら訳語に悩まれるお姿が今も臉に浮かぶ。顔を歪めて首を振りつつ、「"reflect"は難しい」などと呟いておられたことがあり、天才とも称されておられる方が真摯に格闘される姿に、胸を打たれたことがある。

2003年、『国富論』を拝読させて頂いた時は、アダム・スミスがこれほど明瞭な訳文で読めることに感動して涙が出た。山岡さんの訳書の中で、これまで『バブルの歴史』が一番好きだったが、それ以上の本が出て嬉しい。そう出版お祝い会の席でお伝えできた。経済翻訳塾でお世話になった感謝の気持ちも、いつかお伝えできるようになればと願いながら、叶わなかったが、訳書のファンとしての気持ちは、お伝えできてよかった、と今にして思う。

2010年、『ケインズ説得論集』にも、やはり感動して涙が出た。ケインズがこんなにわかりやすいのかと。愛読者としては、これから古典の新訳に注力されると伺っていただけに、古典の名訳が読めるのを、どれだけ楽しみにしていたことだろうか。

「先生と呼ばれる馬鹿じゃなし」「弟子はとらな」と仰っておられたが、山岡門下生から多数の優

秀な訳者が育ったのはもちろん、山岡さんの訳書、翻訳通信、著書を通して、密かに「師匠」と慕っていた人も少なくなかったはずだ。

介護の日々を経て、翻訳の分野が医薬にシフトし、認知症医療とケアの研究にも足を突っ込むようになったが、何をしても、山岡さんの仕事に対する姿勢を思いだしては居ずまいを正されることがある。まさに心の中の師匠である。

本当にどうもありがとうございました。
心からご冥福をお祈り申し上げます。

貫井佳子（翻訳者）

翻訳塾に参加していた1990年代終わりのころ、私は金融機関で社内翻訳者として働いていた。いわゆるDINKS生活を謳歌していて、今思えば体力的にも時間的にも余裕があった。あの時期に山岡さんとの出会い、仲間と切磋琢磨しながら真剣に翻訳と向き合う機会を得たから、細々とだが、この仕事を続けてこられたのだと思う。山岡さんからいろいろ学んだなかで、ずっと大事にしている教えが二つある。一つは「原著者は何を言いたいのか。最初から日本語で書いたらどうなるのかを考えて訳せ」、もう一つは「足りないと思う情報は、注釈という形に頼らずに本文中できちんと補え」ということだ。

翻訳に関しては厳しかったが、しゃべり出すと止まらない、とても親しみやすい方だった。懇談会では「翻訳は35歳を過ぎてからが勝負」、「翻訳をやるという人間は、男はさておき女性はみな真面目で、化粧が濃い人はほとんどいない」（その場にいた女性陣に当てはまっていた）といった持論をいくつも披露して下さった。また、不安定な翻訳者の暮らしをいつも気にかけておられた。私が既婚者で、普通のサラリーマンの夫がいると知ると、「それならよかった」と安堵の表情を浮かべられたのだった。

2002年、私は出産などを機にフリーに転じたが、それほど不安ではなかったように思う。“サラリーマンの夫”や楽天的な性格のおかげだったが、山岡さんにつながっていれば何とかなるのでは、という不屈きな考えもあったはずだ。実際、山岡さんはすぐに出版翻訳の仕事を紹介して下さい、初めての訳書を出せた。その後も「こんな本の話があってね」と、たびたび電話を下された。だが前の仕事で自分の未熟さを痛感したこと、子どもが二人になって長

期の案件は難しくなったこともあり、お断りし続けてきた。無責任に引き受けてはいけなくて自分に言い聞かせていたが、育児を言い訳にして逃げているようで、後ろめたさがつきまとった。

これ以上、ご好意を無にしておいてはいけないと思ったのは、2010年末に新たに本の仕事を紹介されたときだ。子育ても少し楽になり、そろそろ精神的に独り立ちしなくては、と覚悟を決めた。山岡さんは「共訳は難しいけど、ひととおりがチェックする形をとってもいいよ」と言って下さったが、自分でも驚くほどきっぱりと「ひとりでやります」と宣言したのだった。とはいえ、久しぶりの本の仕事はやはり苦しかった。原著者が言いたいことを一生懸命考え、ちっぽけな頭の引き出しから、ふさわしそうな表現を選び出す。そんな作業の繰り返しで、ふだん瞬発力だけでこなしている産業翻訳とは勝手が違う。しかも私は、わからないことにおつかるたび、徹底的に調べて納得してからでないとなら進めない。震災で自宅周辺が液状化し、日常生活に少なからず影響したこともあって、もともと遅い筆はさらに鈍った。

早くしなければという焦りと、いいかげんな仕事はできないという意地の板挟みになってもがいていたとき、『翻訳通信』2011年4月号が届いた。そのなかで山岡さんは、震災後の政治家らの無能ぶりを嘆いたあと、例によって翻訳の話へとつなげていた。「重要なのは、自分の立場でまともな仕事をしていくことだろう。素人のような頼りない人間が目立つ世の中で、プロとはどういうものかを示していくことには意味があるはずだ。翻訳者は現場の人間なのだから、誇りと責任感をもって仕事をしなければならない」。胸にずしんと響いた。そして強く思った。歩みはのろくても、妥協せず、自分のやり方を愚直に貫こう。それが今の私にとって「誇りと責任感をもって仕事をする」ことなのだから、と。

久しぶりに鷺沼の事務所を訪ね、あの言葉が支えになったと伝えたい。何とか出版のめどがつき、そう考えていたころ、山岡さんが突然、帰らぬ人となり、言葉を失った。ご本人が嫌がるので「先生」とお呼びすることはなかったが、山岡さんは亡くなられた今も唯一無二の翻訳の師だ。「山岡さんならどう訳すか」、「こんな文では山岡さんに笑われる」。そう師を意識しながら、翻訳を続けていくのだろう。これから先も、自分なりに誇りと責任感をもってこの仕事に取り組んでいきたい。それが私にできる最大限の恩返しだと思うから。

翻訳と健康と *DictJuggler.net*

山岡さんがお作りになった『翻訳訳語辞典』と『経済・金融訳語辞典』を DictJuggler.net で公開させていただいている。立ち上げ時に『翻訳訳語辞典』とともに公開した『類語玉手箱』、その後加わった『環境訳語辞典』も合わせて四種類の辞書を現在公開中だ。山岡さんが亡くなられて、辞書の今後をご心配なさった方からご連絡をいただいたが、ご遺族のご了承を得て公開を続けられる予定なのでご安心いただきたい。

残念なことに、時々行われていた山岡さんによる「バージョンアップ」はなくなってしまいが、使い勝手をよくする改良作業は続けていくつもりなので、ご要望などがあればサイト経由でご連絡をいただければ幸いである。また、公開の経緯について記した「[翻訳通信 2007年4月号](#)」にもあるとおり、読者の皆さんが独自にお作りになった「辞書」も是非このサイトで公開させていただけたらと思う。

翻訳と健康

翻訳は魅力的な仕事だ。だが、きつい仕事でもある。山岡さんの早すぎる旅立ちも、長年の無理がたたったという面もあるのではなからうか。

山岡さんを追悼するこの紙面をお借りして、私が今までに習得した健康管理術の一部をご紹介します。私は30年以上ほぼ毎日コンピュータの前に座って作業をしているが、いまだに眼鏡なしで生活をしているので、ここでは目の健康に絞ってみた。

大きな文字で表示する

文字はできるだけ大きく表示して使うのがおすすめだ。細かい字を見つめるのは目への負担が大きい。Word や Excel なら拡大機能があるので簡単だ。ファイルやフォルダの管理をするエクスプローラ (Mac ならファインダ) などでも文字の大きさを設定できる。設定方法はさまざまなのでここで詳しくは説明しないが、「文字の大きさ Windows」などとネットで検索すれば詳しいページがヒットする。私がふだん使うのは24ポイントの大きさだ。ちなみにマウスのポインタ (矢印) も大きくすると見やすい。

大きめのテーブルに大きなモニタを2台置く

大きなモニタを使うと大きな文字で表示しても十分な情報を表示できる。ひとつのモニタで Word やエディタなどを起動して、もうひとつのウィンドウで辞書ソフトやインターネットブラウザなどを表示するというのが基本の構成としておすすめだ。

ノートパソコンと外部モニタという構成でも悪くはないが、できれば大きなモニタが2台あったほうがよい。そしてこの2台のうち1台を少し手前に、もう1台を奥のほうに置く。奥行きに差を付けるためには、テーブル (机) がある程度大きくなければならない。私は食卓用のテーブルを使って奥行きを確保している。

なぜ1台のモニタを奥に置くかということ、目の筋肉のストレッチをするためだ。画面を見つめるとき、モニタが1台しかない、あるいは2台あっても目からの距離に差がないと、いつも同じ位置で目の焦点を合わせることになる。差があると画面を移動するたびに焦点をずらすため目の筋肉を動かすことになる。わずかな違いだがこれが結構効く。

もちろん時々椅子から立ってのびをして窓の外を眺め、目を休めることも大切。また、バスタオル (そう大きなバスタオル!) をぬらして電子レンジで温め、目に当てるのも効果的だ。適温になるまでに必要な時間は季節によって変わるが、ぎりぎり持てるぐらいまで熱くするのが心地よい。

背景色を黒、文字色を白にする

人間の目は光を発するものを見つめると疲れるらしい。印刷された文字を読むときは太陽光やライトの明かりが間接的に目に入るだけなのに対して、モニタを見つめるとモニタが発する光が直接目に入る。ウィンドウの背景色を黒、文字色を白にして作業をすれば目に入る光の量を少なくできる。Word ならば [オプション (環境設定)] の [全般] で [背景色を黒にする] を指定するだけだ (バージョンに依存するので、違う場合は検索を!)。作業時は、太めのフォントを指定したほうが見やすい。

スポーツ観戦に行く

ストレッチなど体を動かすことも重要だが、スポーツ観戦、とくに外野席から野球を観戦するのも目の健康にはおすすめだ。外野席からバッテリーまでの距離は100m ぐらいはある。試合開始から終了まで3時間程度、楽しみながらずっと遠くを見つめることになる。これがパソコンや読書で疲れた目を休めることにつながる。一試合見終わると、よく見えるようになっていくことに気がつくはずだ。

翻訳にたずさわる皆さんが、できるだけ長く仕事を続けられるための一助になれば幸いである。

翻訳訳語事典の用例収集

山岡さんにはじめてお会いしたのは1999年の1月だったと思う。『翻訳の世界』誌上で募集されていた「翻訳訳語事典の用例収集スタッフ」に応募し、トライアルを経た後、面接のために山岡さんの事務所にかがったのだ。オンラインで公開されている翻訳訳語事典 (<http://www.dictjuggler.net/yakugo/>) とその用例収集については、他に書かれている方がいらっしやるようなので、ここでは説明を控えさせていただきます。

このとき面接を受けたのは7人で、偶然女性ばかりだった。山岡さんは集まった私たちにまず、「ここに来るに際して山岡洋一という人間についてなにか調べてみたか」とお訊きになり、誰もそれほど調べていないことがわかると、「みんなそんなに簡単に人を信じてはいけません。こんな風にメール1本で集められて、私が悪い人間だったらどうする」というようなことをおっしゃった。山岡さんはいつもそんな風に周りの人のことを心配していらっしやる、とても優しい方だった。

この7人は全員その場で採用になり、それから1年間、各自仕上げてきた用例データをデータベースに入れる作業をするため、隔週土曜日に山岡事務所に通うことになった。この土曜日はいま思うと、「山岡学校」のようだったと思う。「フィクション翻訳を勉強中であること」というのも用例収集スタッフの応募条件だったので、7人はみな翻訳者志望だった。毎回、交代でデータベース入れの作業をする間、山岡さんが取ってくださったピザをいただきながら、お話をうかがった。

山岡さんが熱く語ってくださった、日本における出版翻訳の地位、翻訳者のあるべき姿、現在の翻訳界の問題点……などのお話は、当時『翻訳通信』に連載され、後に『翻訳とは何か——職業としての翻訳』（日外アソシエーツ）という書籍にまとめられた。その他にも調べ物のやり方、完成度を上げることの大切さ、自分がこの本を日本で一番理解するんだという覚悟で訳さねばならないなど、まさに翻訳のプロである山岡さんからしかうかがえない貴重なアドバイスもたくさん聞かせていただいた。それから、とにかくたくさん本を読むこと、いい文章にたくさん触れることの大切さも語ってくださった。

そして、秋がやってきた頃に、山岡さんは私たちに「やる気がある人は、なにか訳してくるといい」と言ってくださった。そして私たちがおっかなびっくりお渡しした訳文を丁寧に読んでくださり、問題点を詳細にご指摘くださった。ご指摘が的確であるだけに、とても耳が痛かったが、いま振り返ると、とても得難い貴重な経験だ。それに、私はミステリの中編を何度かに分けて読んでいただいていたのだが、「先が読みたいから、早く訳してきてよ」とおっしゃってくださった時のうれしさは今も忘れない。

私はその後、山岡さんのご紹介で、翻訳の仕事をするようになるのだが、それまでにどれだけのことをご教示いただいたか、初心者で怠け者の私をどれだけ叱咤激励してくださったかははかりしれない。本当に、山岡さんがいらっしやらなかったら、私は翻訳の仕事をしていなかった。私には経済の翻訳はとてできないだったので、他分野の方にご紹介くださり、その後もなにかとお心にかけてくださった。「翻訳の勉強にもなるから、なにか書きなさい」とおっしゃって、『翻訳通信』に駄文を連載させてくださったこともあった。「好きな本を訳せるようになるといいね」と、いつもあの独特のまぶしそうな優しい表情で言ってくださった山岡さん。ご期待にお応えすることも、ご恩返しをすることもできないうちに、逝ってしまわれた。

あるとき、早世されたご友人について、「才能があつて早く逝ってしまう人はどこか違う。そういう人は若いうちから他の人より完成している」とおっしゃっていた。そのとき私は、才能のある人同士にしかわからない世界があるのだなと思ってうかがっていたのだが、まさか山岡さんご自身がこんなに早く逝ってしまわれるとは思ってもいなかった。今でもまだ、山岡さんがもういらっしやらないということ、どこか現実と思えないでいる。

山岡さん、本当にありがとうございました。山岡さんのことですから、天国ですでに新たなプロジェクトを立ち上げていらっしやるのではないかと思います。ご冥福と、そちらでのご活躍をお祈りしております。

生涯の誇り

山岡洋一さんとの最初の接点は2000年秋でした。以前から山岡さんにはお仕事をお願いしたいと思いい、チャンスを窺っていました。ちょうどこの頃、ぜひ山岡さんに翻訳してもらいたい経済書の版権を取ろうとしており、面識のない山岡さんに思い切って電話をしました。

電話で原著の内容を説明すると「そんな価値のない本を出版してしょうがない」と一喝されました。その後、電話の向こうで山岡さんは、現状の出版社の問題点や私の会社の翻訳出版に関する姿勢について、遠慮ない口調で非難され、この仕事は見事に断られてしまったのです。

会ったこともない人にここまで言われた経験はそうありませんでした。これは相当付き合い難い人だと思いましたが、魅力的な翻訳者にここまで言われたままでは後味が悪い。一度でも仕事をご一緒させてもらう機会がほしいと思いました。

電話で一喝された山岡さんの不思議なところは、その後、僕との接点を持って下さったことです。翻訳者や編集者の集まる勉強会や親睦の会に、頻繁に声をかけてくださる。こちらもそれでいい気になり、毎年のように翻訳してもらいたい本を依頼し続けましたが、その後も「面白くない」という理由で断られ続けました。

その頃の山岡さんの関心は古典翻訳に向かっていました。アダム・スミスの『国富論』は、山岡さんにとってのライフワークのように映りました。ある日の夕方、仕事場にお邪魔するしたあと、一緒に近くのピザ屋さんで食事をしました。見晴のいい高台のピザ屋さんで、山岡さんは学生時代の思い出から『国富論』への思い入れまで語られました。さらに協力してくれる出版社が見つかったことも。

実は、『国富論』の翻訳原稿をうちの会社で出版させてもらいたいとお願いしていたのです。しかし、この時の話を聞いて、うちの会社からの出版は無理だと悟りました。以後僕は、『国富論』の応援団に回ることにしました。

『国富論』が完成すると、見本本を寄贈してくださいました。お電話もいただき、その声からはやり遂げた達成感がヒシヒシと伝わって来ました。

その後、『国富論』刊行を祝う会を開催することになりました。声をかければ100人以上集まるもの

の、山岡さんは小規模でやりたいとおっしゃいます。ご本人の希望で集まった参加者は20人程度。場所は日比谷公園内にある一軒家のフレンチレストラン「南部亭」でした。春の日の土曜日の午後、新緑が美しい公園内でのパーティーは、実に心温まるものでした。『国富論』の編集者、装丁家はもちろんのこと、これまでの山岡さんの古典翻訳の活動を知る知人が集まりました。南部亭での会食が終わっても皆名残惜しく、同じ日比谷公園内のカフェで夕方まで話し続けていました。その時の、春の日差しの下で見せた山岡さんの柔らかない笑顔は、いまでも忘れられません。

山岡さんとの初めての仕事を実現したのは、2010年でした。以前から山岡さんが注目されていた著者が書いた本を僕の会社で契約できたのです。初めてお話ししてから10年かかりました。

初めての山岡さんのお仕事は喜びよりも緊張でした。なんせ、どれだけ仕事に厳しい人かはいやというほど感じていたからです。正直、また怒られたらどうしようという不安もありました。

幸いにも編集段階でも順調にすすみ、それは杞憂に終わりました。この仕事で山岡さんの神髄を見せられた思いでした。人に厳しい以上に、自分に厳しい。ここまで自分はやられるから、出版社にも高い要求をされるんだと。編集者冥利とは、こういう翻訳者と仕事をするということです。次の仕事をお願いするのが楽しみになりました。

山岡さんがお亡くなりになられたのは、それからちょうど1年後でした。お亡くなりになられる1週間前に電話をしました。用件は、版権をとった経済書の翻訳をお願いしたいということでしたが、これも断られました。思えば山岡さんは古典翻訳をやりたいかたかたのしょう。晩年、僕はその邪魔をしたのかもしれない。僕としても一回しかお仕事を一緒にできなかったのが残念でなりません。

ただ考え直してみると、「山岡さんと一緒に仕事をした編集者」のひとりに最後に加わることができたのです。最後の最後でしたが。これは僕の編集者としての、生涯の誇りとなるでしょう。

山岡さん、加えていただいてありがとうございます。

山岡さんからの贈り物

朝6時すぎ。

いつもなら深い眠りに落ちている時間帯である。それなのに、あの日はなぜか目が覚めていた。いや、もしかしたら、夢のなかで目を開けているつもりになっていただけかもしれない。

早朝の電話は珍しいから、「何かあったのかな」といぶかりながら起きあがったのを覚えている。

「実は、知らせておいたほうがいいと思うことがあって……」。受話器をとると、電話の向こうからはこんな言葉が聞こえてきた。

当時わたしはアメリカに住んでいて、5年ぶりに日本に戻るための引っ越しを10日後に控えていた。移民法などの関係ですでに最終の入出国日を届け出ていたから、途中帰国はできなかった。日本に帰り着いたのは山岡さんの告別式の5日後だった。

* * *

山岡さんに初めてお目にかかったのは2001年の冬だったと思う。お目にかかったといっても、大勢のいる場で名刺交換をして二言三言あいさつを交わしたただけである（実は、翻訳をテーマにした山岡さんの著書を拝読したことがあり、その内容から「とても厳しそうな方だ」という印象を持っていたため、怖くてあまり近寄れなかったのだ）。

しばらくすると、まったく面識のない編集者から仕事の依頼があった。打ち合わせに行くと、「山岡さんから有賀さんの名前を聞きました」と言われた。「この人が類書を訳しているから」といって、翻訳の仕事をはじめて日が浅く、ほんの数冊しか訳書のないわたしに、間接的に仕事を紹介してくださったのだった。もちろん、山岡さんご本人はそんなことはおくびにも出さなかった。

この時の編集者には仕事のうえで大きな恩義を受けたが、個人的に特に親しかったわけではなく、どちらからともなく自然と連絡が途絶えた時期もあった。何年かの後に予期せず再会したのも、きっかけは山岡さんだった。少し不思議な気もするが、人の縁とはこういうものかもしれない。そしてここ数年は、いっさい仕事を抜きにして、もっぱら友人として話し相手、相談相手になってもらっている。

この間、山岡さんとは多くても年に1回お会いするかどうかだった。仕事上での直接的なつながりは少なく、事務所に伺ったこともない。電話で話をする機会は年に1、2回だったのだろうか。ご存じの方も多いと思うが、山岡さんは男性にしては珍しく長

電話だった。仕事だけでなくいろいろと話が飛んだ後、いつも不意に「それじゃあ」といって切れる。ディスプレイを見ると、通話時間はたいてい60分弱だった。「几帳面な方なので、もしかしたら『電話は1時間まで』というルールでもお持ちなのだろうか」と不思議だったのだが、実際のところは分からずじまいである。

こんなふうに、山岡さんとは決して密につながっていたわけではないが、ここ数年は、年の瀬になると内輪の忘年会をするのが恒例となっていた。山岡さんの存在があったからこそ互いにつながった顔ぶれである。2010年の忘年会では、わたしが注文しようとした品が「2名様から」だったため、しかたなく別の品を探そうとメニューと睨めっこしていたら、山岡さんは「僕もそれにしよう」といって同じ料理に付き合ってくださいました。

そんな優しく面倒見のよいお人柄に甘えてか（この頃には「怖い」という印象は薄れていた）、わたしは山岡さんの前で仕事についての弱音を吐くことが多かった。そんな時、山岡さんはいつも、「こうすればいい」「こう考えればいい」と思考軸のようなものを授けてくださった。

友人。そして、厳しい時代をフリーランスとして生き抜いていくための思考軸。この両方が、山岡さんからいただいた大切な贈り物である。

* * *

わたしはお通夜にも告別式にも参列していない。だからかどうかはわからないが、わたしにとっては山岡さんは亡くなってはいない。

2011年の師走にも、前の年と同じメンバーで忘年会をした。家庭的な小さいお店で4人してテーブルを囲み、料理を取り分けたり、デザートを交換したりしながら、四方山話に花を咲かせた。寒い日だったが店内は温もりに満ちていて、目には見えなくても、わたしたちの輪の中心には山岡さんがいた。

わたしは山岡さんの魂が自分のそばにあるとは思わない。けれど、山岡さんを介してつながった友人たちと集い、語らうとき、そこには必ず山岡さんが一緒にいて、穏やかな表情でゆったりと椅子に腰かけ、たばこをくゆらせている。

これからも。いつまでも。

山岡さんの思い出

山岡さんと初めてお目にかかることができたのは、2002年10月に開催されたJTF（日本翻訳連盟）主催の翻訳祭にご本人がパネリストの一人として出席されたのがきっかけでした。その席上、なかなか僕のところに訪ねて来てくれる若い翻訳者が少ないみたいな発言をされたので、それを受けて、その翌月に当時翻訳会社に在籍していた女性の同僚翻訳者4名と誘い合わせて総勢5名で山岡さんの職場を訪ねたのでした。あらかじめその旨をメールで連絡しておき、質問事項なども事前にメールでお伝えした上でどんな職場なんだろうと期待しながら訪ねました。団地の中の一室でした。ご自宅は職場の近くにあるようでした。

自己紹介を交えて色々と歓談した後、さっそく質問を開始し、当時すでに刊行されていた『経済・金融英和/和英実用辞典』のような大部な辞書を仕事のあいまを見て上梓されたのはすごいなあ、と以前から思っておりましたので、その作成ノウハウも含め、質問をした記憶がありますが、ただ、あまりにも細かいことをお聞きするのもいわばご本人の「企業機密」(?)に抵触はしないかとの気遣いもあり、あまり突っ込んだことも聞けず仕舞いではありました。経済、金融の辞書のみならず、日本文学作品のさまざまな英訳の文例を中心にそれらの対訳を対照させて用例集を作成し、ウェブ上で公開しておられることも承知しておりましたので、それらのスタッフの組織化や体制作りについてもお聞きしたかったのですが、かなり内部事情的な展開になりそうで、産業翻訳に身をおく人間としてはやや異分野(?)であるとの意識も手伝い、それに関する質問はぐっと呑み込んだ記憶があります。

そうこうするうちにやおら奥の部屋から文庫本の既訳の『国富論』の1冊を持って来られると、ここは訳がおかしいだろ、みたいなことを経済用語ではなく、極めて生活レベルの当時のイギリスでの生活用具に関する日本語表現について指摘をされたことを記憶しています。今にして思えば、すでにその当時からその新訳の準備に取りかかれておられたのでした。お話の印象からは翻訳を量産している感じではなく、じっくり吟味しながら翻訳を進めておられるという印象を強く持ちました。

同僚の一人が金融・経済関係の分野を目指していることを知ると、もしよかったら是非、翻訳サンプルを持っていらっしやいみたいなことも言われ、同

時に、知り合いの出版社の編集スタッフ（複数）がいかにも優秀な翻訳者をいつも探し求めているかということにも熱烈に言及されました。この日を契機にそれ以降もなにか山岡さんが主宰する会合に出席させていただきましたが、それらの一連の集まりからもいかに山岡さんが日々の仕事をこなしながらも同時に時間の許す限り、こういう埋もれた人材発掘のチャンスに時間を割いておられるかということを感じないではおられませんでした。

訪問当日は、テーブルの上に置かれたみかんをいただきながら、色々なことに話が及びましたが、夜も更けると、なんと今度は、我々を近くのイタリアンレストランに誘ってくださり、さらにその後は、ご自分の車で最寄りの駅まで我々を送迎して下さったのには一同が恐れ入りました。ネット上の山岡さんの「翻訳は簡単な仕事じゃないんだ」という有名なインタビュー記事から感じられるこわもてのイメージとは裏腹に、実に面倒見のよい誠実なお人柄の人物であることを印象づけられたまま私どもは最寄りの駅で山岡さんを後にしたのでした。

それから10年後、2011年11月の翻訳祭でも何名かの講演者の講演を聞く機会がありましたが、出版翻訳や金融・経済関連の翻訳に携わっておられる方がいずれも講演時に山岡さんに言及されたのは何か偶然ではないような気がします。折しも2000年当時のネットに執筆された文章を採録した書籍を『翻訳家になろう』（青弓社）と題して柴田耕太郎さんが今年の1月に上梓しておられ、その後書きには、「翻訳の戦友である山岡洋一にこの書を捧げる」とあるのを見て、その内容が、去年（2011年）の翻訳祭でその内容もさることながら、その語り口調がドイツ語に関口存男（つぎお）ならば、英語界には柴田耕太郎さんありと彷彿させずにはおれないような口伝的&講談的講演を披露して下さった翻訳業界における生き証人的な叙述に喚起され、拙文を寄せる契機となったことを末筆ながらお伝えする次第です。

山岡さんのご冥福をお祈りします。

山岡洋一と古典新訳

青天の霹靂とはこういうことをいうのだろうと思った。昨年8月22日の朝、いつものように新聞を読んでいると「山岡洋一さん」という文字が目飛び込んできた。山岡逝去を知らせる記事であった。

山岡洋一という名前に出会ったのは、朝日新聞の書評欄である。2003年2月付の同欄で『翻訳通信』というサイトのあることを知った。翻訳と日本語に対する熱い主張が手を替え品を替え記載されている。訳語の間違いやカタカナ語の不適切さなどの指摘を含めて同感を覚える内容ばかりだ。思わず読後感をメールで送信したところ、丁寧な返事が返ってきた。それ以降、メールを通しての交流が始まった。

主として『翻訳通信』を通してだが、多くのことを学んだ。なかでも経済学の古典翻訳に関しては教えられることが多かった。既訳に対する山岡の評価は適切で厳しい。その姿勢を一言でいえば「学者訳批判」ということになるだろう。ごく最近まで、専門書は学者が訳すものであって翻訳家が訳すものではないというような通念があったようだ。ところが山岡にいわせれば、学者の訳したものは「英文和訳」で「翻訳」ではないという評価になる。たとえば金子武蔵訳『精神の現象学』に対して、「金子訳の特徴は原語と訳語の一对一対応、英文和訳調の訳文にある。『原書』を読むときの参考として使うことが目的になっており、読者が訳書だけを読むとは想定されていない」（『翻訳通信』2002年9月号）と書いている。

最近の主張を見ても、英語・日本語・経済・経済学の知識に裏打ちされた山岡の舌鋒は鋭く辛辣だ。「ケインズの『一般理論』に待望の新訳があらわれたと喜んだが、期待が大きかっただけに、深く失望することになった。塩野谷九十九訳と比較すればともかく、塩野谷祐一訳と比較した場合には、少なくとも翻訳のスタイルでは進歩がないし、翻訳の質という点ではむしろ後退していると思えたからだ」（同上、2008年3月号）。「今回、機会があって、この2つの既訳[ケインズ「孫の世代の経済的可能性」]を詳しく検討した。そして正直なところ、質の低さに少々驚いた。戦後のこの時期になると、翻訳調の栄光の時代は終わり、墮落の時代がはじまっていたのだろうと思わざるを得ない」（同上、2009年8月号）。

学者訳の弊害は数多い。たとえば古典の翻訳が理解できないとき、それが翻訳のせいであることがよ

くある。原著を手元に置いて読まないで理解できないような訳文では一般の読者が理解できないのは当然だ。いまや翻訳は翻訳家に任せるべしという時代になったのだと認識すべきであろう。学者は研究に専念し、翻訳家は翻訳に専念するのがよい。そして翻訳書は、山岡がいうように「原著者が日本語で書くとしたらこう書くだろうと思える翻訳」で読みたいものである。

ところで、このような「驚くほど誤訳や不適切な訳が多く、ケインズの主張が読み取れていないのではないかという印象をもった」（同上、2009年8月号）と山岡が書くような翻訳書が世にはびこる原因はどこにあるのだろう。山岡は出版社にも責任があるというような書き方をしているが、わたしは出版社にこそ責任があると思う。もはや学者が訳したものなら何でも尊重するという時代ではない。そのことを出版社は強く心に留めるべきだ。そうすることが出版不況を解決するひとつの方策にもなるのではないかと思う。

さて、いまとなってはいくら望んでもかなわぬ夢となってしまったが、ケインズの『一般理論』と（山岡自身、次に訳してみたいとわたしにメールをくれた）リカードの *On the Principles of Political Economy, and Taxation* はぜひとも山岡洋一に訳し直してほしい。実現していれば、多くの学徒が恩恵を受けたに違いない。そんなふうに直言しておくべきだったと、いまさらながら後悔している。

ちなみに、山岡洋一とは一度だけ会って話をしたことがある。『国富論』翻訳完成を祝う会に出席したときのことである。自分の仕事に絶対の自信をもった温厚で真面目な人という印象を受けた。そのような機会が得られたのは、『国富論』第1編の翻訳が終わった段階で「評価版」が印刷されたとき、それに対する学生の反応を確認する役割をわたしが引き受けたことにある。古典新訳にあたってはすべての既訳を徹底的に検討するというのが山岡の方針だが、『国富論』のときはさらに慎重な段階を踏んだということであろう。このような翻訳姿勢を見ると、山岡は翻訳家であるとともに真の学者でもあったのだと思う。

【追記】本稿のスペースに書けなかったことを、「山岡洋一逝く（1-8）」と題してわたしのサイト (<http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/~mizutani/>) に掲載した。
(南山大学経済学部教授)

無隣庵を照らした一条の光

無隣庵という呼称は、山岡さんとの長電話のなかで生まれた。

その頃のわたしは、会社勤めを辞め、自宅に引き籠っていた。本を読むか文章を書くか酒を飲むか、といった情けない暮らしぶりだった。

「テレビやネットで垣間見る世間は、自分の生きている世界とは別のところにあるような気がする」と日増しにつる疎外感を打ち明けると、山岡さんは、「有隣堂なんて書店があるけど、無隣堂、無隣庵だよ。それでいいじゃない、好きに書いたらいいんだよ」と、愉快そうに笑った。

電話を切ったあとには、やる気が湧いてきた。自分にもなにかできそうな気がした。

山岡さんとの長電話は、いつもそうだった。編集者、引き籠り、翻訳者、と、こちらの立場がどう変わろうと、山岡さんは少しも変わらず、のぼり坂に音を上げる機関車に石炭をくべるがごとく、せっせと燃料をくべてくださった。ご本人はそんなつもりではなかっただろう。でも、わたしにとっては、山岡さんのちょっとした一言が大きな支えになった。政治経済の諸問題の本質をズバリと射抜く洞察力に、いつも大いに刺激を受けた。ときには、「お願いがあるんだけど」と、宿題を出してくださった。

山岡さんからの宿題はほかのすべてに優先した。仕事として引き受けた執筆や翻訳よりも、山岡さんから与えられた宿題のほうが、ずっと大切に、夢中になれた。自分の力以上の、限界を超えたところへ導いてくれる気がした。

なかでも忘れがたいのは、若い訳者から持ち込まれた古典文学の試訳を読んでほしいと頼まれたときのことだ。訳文だけ吟味すればよいとのことだったが、毎回、結局は原著と、入手できる既訳のすべてを取り揃え、まるで自分が訳すかのように原文に向き合うことになった。それまでに何度か読んでいた作品でも、そうして向き合うと次々に疑問がわいてきて、疑問を解決するごとに発見があった。作者の息遣いまでもが聞こえてくる、そんな瞬間が何度も訪れ、物語のなかの空気、温度や湿度まで、ありありと肌身に感じた。翻訳の喜びとは、この濃密な読書体験にあるのだ、と身をもって知った。翻訳に没頭すれば、どこへでも、どんな時代の、どんな世界へでも、飛んでゆけるのだった。

「テレビでアルプス山頂からの眺めなんか見せないでほしい」

知り合って間もない頃、山岡さんがそう嘆くのを聞いて、おかしいことを言う人だなあ、と思った。

でも、今は少し、その心がわかる。山岡さんは、原著にびたりと寄り添って、どこへでも行けたのだ。18世紀のイギリスの空気を吸うことができたのだ。思考力と想像力のかぎりを尽くして、深い読書から得た実感的なものを、堂々たる、そしていきいきとした日本語にしてみせたのだ。

時折、この知の巨人、翻訳家山岡洋一は、どのようにして生まれたのだろう、と不思議に思った。ストイックでエネルギーギッシュな仕事ぶり、頑迷固陋なアカデミズムに対する苛烈なまでの批判精神、年齢や性別にかかわらず他者に注がれる温かいまなざし、剛胆な筆致からは想像もできないこまやかな感受性。そして、内奥に潜む、マグマのような激しさ――。

感傷的な話には滅多にならなかったが、一度だけ、鷺沼の居酒屋で、東南アジアでの日々を語ってくださった。あのとときの遠い目は忘れられない。

「地平線と水平線と、でっかいパイプラインしかなくてね。他にはなーんにもないんだよ。変な英語を喋るいろんな人種の技術者が世界中から集められて、そいつらを働かせるんだよ」

わたしの頭には、映画のワンシーンのような、コントラストの強い灼熱の大地が浮かんだ。例によって詳細は語られないので、勝手に想像し、勝手に感慨にふけた。その日から今日までの道のりは、決して平坦なものではなかったろう、と。

山岡さんにとって翻訳は、技でも術でも業でもなく、「道」だったように思う。道を究めようとする営みは、困難への挑戦の連続だったろうが、人間の可能性を信じていた山岡さんにとっては、苦しくも楽しい冒険だったにちがいない。

山岡さんは、ダニエル・デフォーやジュール・ヴェルヌの冒険小説が大好きだった。震災のあとの電話でも『十五少年漂流記』の話になった。人間には、困難な状況を切り拓くための知力や精神力が備わっているはずなのに、政治家、東電、マスコミときたら……！と憤っておられた。権威にあぐらをかき、真剣に頭を使わない輩には、容赦なく手厳しかった。

もう、あのくぐもった、はにかむような「もしもし、」は聞けなくなってしまった。長い長い旅に出られたのだと、思うことにしている。今でも山岡さんの存在、あの佇まいが、たしかに感じられるから。

「カタツムリの歩み」を支えてくださった言葉

山岡先生が急逝されてから五か月が経ちました。突然の訃報に驚き悲しむばかりでしたが、ようやく、先生から頂いた言葉の意味を改めて考え心の整理をする気持ちになりました。

私はシステムエンジニアとして働いておりまして、仕事の上で英語や翻訳に直接関係することはありません。しかし学生時代に、家庭教師として英語を教えていた高校生から、単語が覚えられない、繰り返すだけではすぐ忘れてしまう、と泣きつかれたことがきっかけになって、英語の語彙習得法について考えるようになりました。現在、二人の仲間と一緒に、語源の知識を機軸にした基本語彙習得辞典を提案するサイト『こんな辞典が欲しいと思いませんか』を作っております。三人だけで辞典を完成させるのは無理なので、まずは自分達が構想している辞典の「雛形」を公開しようと思ったのです。「雛」どころか「卵」のような状態のものですが、仮に『英語ワードパワー』と名付け、少しずつ制作を続けています。

山岡先生に私達の企画をお知らせしたのは、五年ほど前のことでした。『英単語のあぶない常識』、『翻訳訳語辞典』、『翻訳通信』から、言葉に尽くせないほど沢山のことを教えて頂いている事について、感謝の気持ちをお伝えするメールの中で申し上げました。先生が早速ご覧くださったことだけで私達はうれしかったのですが、数年後、「サイトも充実していくようで、楽しみにしています。こういう仕事は何よりも継続が大切ですから、長く続けていただけるようお願いいたします。」というメールを頂きました。この頃までに私達は、先生の業績が「翻訳革命」と呼べるほど大きなものであることを理解するようになっていました。又ちょうど、『国富論』の翻訳を読んで震えるほど感動し、先生に対する尊敬の念をいっそう深めていたところでした。その先生が、私達が細々と続けてきた仕事を見守ってくださっている、また、やり遂げる価値があるものだと認めてくださった、そう思うと、本当に有り難く勇気づけられる思いでした。

先生が私達の辞書作りに関心をお寄せくださったのは、ご自身が、新しい考え方に基づく英和辞典を作るための様々な構想をお持ちだったからだと思います。『翻訳通信』2010年10月号には、英和辞典が提示すべきなのは「訳語」ではなく「語義」とあると書かれています。辞書に出ている訳語を当てはめるだけの「翻訳」が、結局は私たちの文化を墮落さ

せることになる、という危機感を抱かれていたために、辞書は何よりも、語句の意味を理解させるように作られるべきだと考えられたのではないのでしょうか。私たちも、単語と「訳語」をセットにして丸暗記していくような勉強法は、子どもたちの知性をゆがめかねないと感じております。全ての語にあてはまるわけではありませんが、単語の意味を、「語源的意味」から考え理解し記憶していくようにすれば、辞書の訳語だけを金科玉条とすることもなく、適切な訳語を自分で考え出す力もつくはずですよ。

サイトの更新履歴をご覧いただければ一目瞭然ですが、私たちは本当にノロノロと蝸牛の歩みのように進んできました。先生宛のメールにも、「相変わらずのカタツムリの歩みですが」と書いておりましたが、あるとき先生が、「ワードパワーのサイトをときどき覗いております。カタツムリの歩みといわず、亀の歩みになるよう期待しております。」と書いてくださいました。そのときは、カタツムリが亀になるのはむしろ嬉しいと嘆息するばかりでしたが、先生の言葉を反芻しているうちに、いつまでもカタツムリのままでいたら、私たちの試みは世の片隅に埋もれたままで終わってしまう、という思いが次第に強くなってきました。

『翻訳通信』の上掲号で先生は、翻訳者が主力になれば、翻訳の新しい潮流で得られたノウハウに基づく、優れた辞書の開発が可能になると書かれています。私たちも、翻訳に携わる方々の中には、既成の英和辞典に満足できず、新規の辞典を制作したいと考えている方々がいらっしゃるような気がします。そのような方々が、私たちの企画に共感し参加してくださったら、カタツムリの歩みが「亀の歩み」になる道も開け、類例のない英和辞典を次世代の子どもたちに送り届けることができるかもしれません。

今なお悲しみは募るばかりですが、今後も、先生が書かれたものから学んでいけることは救いのように感じられます。そして、「何よりも継続が大切」という先生の言葉を心の支えにして、これからも歩み続けたいと思っております。

不思議な遠縁

サラリーマン時代に企画部門にいたため仕事の必要上あれこれ経営戦略本を読みまくっていた。『ビジョナリー・カンパニー』は必読本で、実際に本書で取り上げられている会社も訪問し経営改革案などもまとめたりしたものだが当時その翻訳者がだれなのか、翻訳がどうなどと考えたこともなかった。

山岡氏の存在を意識したのは翻訳者（金融翻訳）になって以降である。とはいえすでに「翻訳界の巨人」のような存在だった山岡さんの訳書を真正面から学ぼうとは考えなかった。自分は翻訳出版とは無縁だと思っていた。むしろ実務翻訳者としての心構えを説くインタビュー記事やエッセイに熱心に目を通した。「翻訳は難しい」「翻訳者は相応の対価を得るべきで、自分を安売りするものじゃない」。こうした言葉の一つ一つが駆け出しの自分を鼓舞してくれた。「こんな凄い人も俺と同じ悩みを抱えながら努力を重ねたのだ」と思うだけでやる気が出た。「下訳を使う奴の気が知れない。最初の訳し起こしこそが一番面白いのに」という言葉は数年後に自分が出版翻訳に関わるようになって実感することになるが当時はピンと来なかった。

そうして読んだ中に学生時代に圧倒的な影響を受けた S 先生についての文章があった。S 先生は毎週 Time の 1 ページを精読するクラスとペーパーバックを 1 冊読む多読クラスを担当されていた。今から 30 年前、「俺こそ英語が一番できる」という自信満々の学生 40 名ほどが先生を行司役に真剣勝負しているような授業だった。S 先生はそうした血気盛んな学生たちの前に開襟シャツにジーンズ、バックパック姿で現れ「夏休みにロンドン行ったら古本で手荷物が重量オーバーになっちゃってサー」という乗りで授業をされていたのだが、山岡さんのエッセイを読むとどうも S 先生、Newsweek 日本版の翻訳チームにも同じ雰囲気を感じていたらしい。並みいるプロ翻訳者がウンウン唸っている最中に悠然と遅れて現れサラッと訳して一等最初に帰って行く様に「天才的だ」と感動したという内容だったと思う。それを読んだ頃の私は実務翻訳の傍らある学習塾で教えていたのだが、偶然 S 先生も多読クラスの主任教授のようなお立場で関わっておられ 20 年ぶりに再会。私が山岡さんのエッセイのことを話すと大いに照れておられたが満更でもないご様子だった。

不思議な縁を感じていた私はいつかそのことを山岡さんに確認したいとずっと思っていた。そして 3、4 年前のノンフィクション翻訳者の忘年会後にその機会はやってきた。私は押しかけで受付をさせてもらい、そのご褒美に慰労会に潜り込めたのだ。「S 先生のエピソードは本当ですか？」こんな不躰の質問にもかかわらず「いや彼は凄かったよ。研究とか出世には全然興味がないらしくて自分の好きなことを追求しているところは実に S さんらしい……」と気さくに答えてくれた。S 先生の仕事をよくご存知であれこれ裏話を聞かせてくださった。「貫くもの」を持った人をお好きな方なのだな、そしてお二人は認め合っているのだなと思った。地位とか肩書きとかはあまり重視されていないご様子で、私のような新米の話や意見にも熱心に耳を傾けていただいたことに感激したことをよく覚えている。

私の初めての翻訳書となったある経営戦略本は、同じ著者の前の翻訳者が山岡さんだった。その時初めて原文と訳文を見比べるという作業をした。しかし当時はまだ「こういう表現をこう訳す」、つまり単にその仕事を無批判に受け入れることしかできなかった。名前も出ない無我夢中の処女出版翻訳の名ガイド役を果たしてくれたことに感謝しつつ山岡さんの訳を大いに利用させていただいたのである（後でご本人にお詫びとお礼を申し上げた）。

2 年ほど前から自分の勉強のため、毎朝仕事に入る前の 30 分ぐらいを優れた原文と訳文を音読したり、自分で訳して訳書で添削したりといったことに充てるようになった。『翻訳通信』で山岡さんはよく原文と訳文を比較しておられる。「優れた翻訳で勉強するのが翻訳力をつける一番の近道」という趣旨のご発言もあったと思う。そのことの意味がつい最近になってようやく感じられるようになった気がする。自分もやっと若手の仲間入りができた（現在 51 歳）と自覚できる昨今、せめてあと 10 年たって、今よりほんの少しでも「縁」の内側に近づけた時にもう一度お話を伺いたかったがその機会はもうない。編集部の方のお計らいで僕らは山岡さんのお書きになった翻訳論をいつでも何度でも読むことができる。そのことの幸運に感謝しつつ、今後も薄皮を一枚ずつ積み重ねる努力を続けて行きたいと思う。

山岡さん、いろいろお世話になりました

「9月号の『翻訳通信』で例のインシュタイン本を取りあげる予定なんだ。君も1本書いてよ」——この電話が山岡さんと直接お話しした最後になってしまいました。ときに2011年の8月、私は『スティーブ・ジョブズ』（講談社）の翻訳を突貫工事で進めているところでした。そして、ああまずい、そろそろ原稿を書かないと間に合わなくなる……そう思いはじめたとき、山岡さんの訃報が入ってきたのです。最後の電話では、お子さんが独立されたので、これからはわがままな翻訳者として古典の翻訳に注力したいと話しておられたのに……。

山岡さんの紹介で始まった出版翻訳

そもそも私が出版翻訳の仕事を経営的にするようになったのは、山岡さんの紹介がきっかけでした。「出版系の実績はないけれど、この本には合う人だと思ふ」と、2005年春、東洋経済新報社の編集さんに対し、『スティーブ・ジョブズ—偶像復活』の訳者として推薦して下さったのです。

その後、日経BPさんから『セキュリティはなぜやぶられたのか』『ウィキノミクス』などかなりの数の訳書が出ましたが、日経BPさんにも山岡さんから一言口添えがあったとお聞きしています。

ノンフィクション出版翻訳忘年会の幹事団

それまでずっと産業翻訳中心だった私は、『偶像復活』が出たころ、出版翻訳の世界は基礎的なことしか知らないし、翻訳者も編集の方も知り合いがほとんどいない状態でした。そんな私が比較的短期間で多くの編集さんに顔を覚えていただけたのも、山岡さんのおかげです。

『偶像復活』がそろそろ出ようという2005年秋、「君にも手伝って欲しいんだけど」とノンフィクション出版翻訳忘年会の幹事団にお誘いいただいたのです。幹事団に入ると、いろいろな方となにかしら話をしなければならぬことが増えます。参加される方々にも名前を覚えてもらいやすくなります。もちろん、幹事団で一緒に仕事をした方々とはいろいろな連絡を取りあうことになります。

『スティーブ・ジョブズ』の翻訳について

実は『スティーブ・ジョブズ』の翻訳も、山岡さんなくしてはなかった話でした。

「ジョブズが初めて公認した伝記が出る」という

ニュースがネットに流れたのは2011年4月でした。ジョブズ公認の伝記が出たら翻訳を担当したいなどその2~3年前から思っていたのですが、問題はどこが著作権を取ったのか、です。それがわからなければ口を開けて待っているしかありません。とりあえず、自分のブログに「やりたい」と書いてから、情報通の編集さんに調べてもらいました。ここで「情報通の編集さん」に頼めたのは、ノンフィクション出版翻訳忘年会の幹事団で仕事をしたおかげ、つまりは山岡さんのおかげです。

講談社さんにアプローチしたとき、私のアピールポイントは、スティーブ・ジョブズ関連書籍の翻訳実績が多いことでした。『偶像復活』のあと、ダイヤモンド社さんから「『偶像復活』を訳したのは井口さんでしたよね」とスティーブ・ウォズニアックの伝記（『アップルを創った怪物——もうひとりの創業者、ウォズニアック自伝』）のお話をいただいたほか、日経BPさんから『スティーブ・ジョブズ 驚異のプレゼン』が出ていました。特に後者はかなり売っていたので、私の訳でスティーブ・ジョブズ関連本を初めて読んだ人がかなりいるはずでした。このあたりの実績は、すべて、山岡さんのご紹介で担当した『偶像復活』があったればこそです。

『スティーブ・ジョブズ』の翻訳については、「おかげさまで、やりたいと思っていたこの本を担当することができました」と報告できなかったことだけが心残りです。山岡さんが亡くなったころは、まだ、誰が翻訳するのかも伏せてくださいと講談社さんから言われていた時期だからです。うすうすおわかりになっていたのではないかと思います。

残された者として

山岡さんはさまざまな形で後進の後押しをされてきました。「実はあれ、僕がやりたかったんだけどね」と言われた『偶像復活』への推薦、経済翻訳塾や古典翻訳塾など、ちょっとした手間のものから膨大な手間がかかるものまで多岐にわたりますが、なにげない形のものも多く、後押しされたほうがそれと気づかないケースもあっただろうと思います。私も、何年もたってから、山岡さんの口添えがあったとわかったことがあります。

山岡さん、いろいろとありがとうございました。山岡さんからいただいたご恩は、少しずつ次の世代に返してゆこうと思います。ご冥福をお祈りします。

怒られてばかり

「怒られてばかりだったね」

あまりにも突然に山岡さんが亡くなられ、葬儀の場で久しぶりに古典翻訳塾のメンバーと顔を合わせたとき、誰からともなくそんな話になった。

ほんとうに、怒られてばかりだった。それでも1人も脱落しなかった。山岡さんが再開を望みながら果たせなかった古典翻訳塾の第1期生として、あのときのことを記しておきたい。

古典翻訳塾がスタートしたのは、2006年1月である。前年の夏に説明会があり、その後に試験を経て7人が塾生となった。教材は19世紀イギリスを代表する思想家ジョン・スチュアート・ミルの『自伝』。隔週土曜日に集まって訳文の問題点を議論する形で訳読を進め、前日朝までに全員が翻訳を提出する。

皆仕事を抱えていたこともあり、訳出範囲は2週間で4ページ程度と、分量としては非常に少ないのだが、これがもう息も絶え絶えになるほど大変だった。とにかく現代の英文に比べると、一文がおそろしく長いのである。20行、30行と続く文章がめずらしくない。しかも節の中にまた節が入った入れ子構造の文章が多いうえ、ミルという人がひどく謙遜家で、「私などがこんなことを言うのはおこがましいのだが」といった表現がそこかしこに挿入されているのも厄介だった。

内容もなじみのない事柄が多く、抽象的な観念を論じた箇所はとくにむずかしかった。また、19世紀イギリスの読者を念頭に書かれたものを現代の日本の読者向けに訳すむずかしさもあった。

そんなこんなで悪戦苦闘の末になんとか仕上げ、金曜日に提出し、ほっとしたのも束の間、夜には山岡さんから「評価は全員Cです。問題点は……」といったメールが来てがっかりすることになる。本来ならそこで落ち込んでいないで、指摘された問題点に取り組み答を考えて会合に臨むべきなのだが、そんな気力も湧かず、行く時間が近づくと胃が痛くなるという体たらくだった。

山岡さんの指摘は、「長い段落の論旨をしっかりと把握できていない」といった比較的大きな問題から、

「ここはなぜ might なのか」「Preacher は伝道師という訳語でよいのか」といったこまかい問題まで多岐にわたった。そうした指摘の合間に、「しつこさが足りない」「古典を訳す場合、既訳を超えなければ何の意味もない」と厳しい叱咤がまざる。添削はされず、提出した訳文は、疑問点に「？」マークをつけて返却された。正しい訳は自分で考えなさい、ということである。

これを続けているうちに、夏頃からちらほらB評価が出るようになり、山岡さんは何らかの形で出版したいとお考えのようだった。だが塾生の方ほとんどその気がなかった。というのも、私たちがお粗末すぎるといふ理由（もちろんこれも重大な理由である）以上に、山岡さんの知識が途方もなく深く、そんな人を前に、出版など考えるのははばかられたからである。なにせこちらが頭を絞って何か思いつきを口にすると、「当時のイギリスにはそういう習慣はなかった」などとさりとおっしゃるのだ。しかもミルは言うまでもなく、ジェームズ・ミル、ベンサム、ヒュームなど当時の思想家の主な論文はすべて読破しているらしかった。たとえば参考文献としてリカード全集を挙げ、「第6巻がとくにおもしろい」と言われたのには呆然とした。『自由論』のついでに山岡さんが訳せばいいのに、そうしたら早く読みたい、と私はとぼけたことを考えていた。

12月16日に、23回目の最後の会合があった。その時点で翻訳が終わっていたのは4章までで、全体の約半分である。そのときに「誰かが出版を目標に最後まで訳してはどうか」と山岡さんはしきりに奨めたが、当然ながら誰も手を挙げない。会合後の打ち上げでも帰り道でもその話をされたが、「いやいや力不足で」と私はへらへらしていた。最後に改めてお礼申し上げ、「よいお年を」とお別れして、「やれやれ、1年間よくがんばった」なんぞと自己満足に浸っていたのである。

ところが翌日、電話がかかってきた。のっけから「なぜやろうとしないのか」と詰問である。怒りが電話線を伝って受話器から火を噴きそうだった。もごもご言い訳しかかると、「根性がない、やる気がない」と遮られた。私はむっとした。やる気がなかったら、あんなくだくだしい文章を1年間もやるも

のか——とは言わなかったが、それに近いことを、よせばいいのに言ってしまった。すると一言、「私の1年間は無駄になった」とおっしゃったのである。迂闊にも私はそのときになって、山岡さんが翻訳塾に割いた時間や労力の大きさに気づいた。1年間あれほどお世話になって、それを無駄にすることはできない。最後まで訳しても出版社でボツになるかもしれないが、それはまた別問題である。「考えさせてください」と言って電話を切ったものの、やるしかないことはわかっていた。そのあと大急ぎで塾のメンバー何人かに相談し、それからお詫びのメールを書いた。ほんとうは全員に話して了解をとりたかったけれど、時間が許さなかった——すぐに返事をしないと破門にされそうだったので。

その後は、火事場の馬鹿力だったと言うほかない。「これ以上怒らせ（怒られ）たくない」というかなり低級な動機からだったが、1年かけて110ページしか訳せなかったものを、3カ月で残り3章95ページを訳し、2007年3月末に訳了した。私一人の訳文に最後までつきあってくれた山岡さんと塾の仲間には、どんなに感謝しても感謝しきれない。夏休みをとって全体を推敲し、最後は山岡さんの奔走により、『ミル自伝』はみず書房から、それも「大人の本棚」というすてきなシリーズの1冊として、2008年1月に出版された。

いま改めて振り返り、古典翻訳塾で教わったことは何だっただろうと考える。翻訳のテクニックといったものでなかったことは、はっきりしている。原著や著者に敬意を払うこと、既訳は恐れず侮らないこと、調べ物は不可能でない限り一次資料に当たること、原文の一字一句まで説明できるよう構文解析を徹底すること……。たくさんのことを学んだ。だが何よりも山岡さんが教えたかったのは、古典を訳す喜びではなかったか。19世紀にミルが書いた、その同じ文章に夜な夜な向き合っていると、ふっと「ああ、そうだったのか」と感じる瞬間がある。思いがけないところに発見がある。むずかしいからこそ、そして読み継ぐ価値があるからこそ、喜びは大きい。翻訳者が一人占めにする深い喜び……。

それを教えてくれた山岡さんはいなくなりました。全然自分の得にならないことで怒ってくれる人を私たちは失ってしまった。もう電話はかかってこない。そのことがひたすら悲しい。

村井 章子

～塾生の心に残る山岡さんの言葉～

山岡さんの言葉は、ときに戒めとなり、ときに励ましとなって、私たちを支えてくれている。ここでは、そのいくつかを紹介したい。

●「完全に解決しないまま途中でよしとしないこと、どんな難問もあきらめず解明できるまで繰り返し考えること、重要にはみえない細かい点も未解決で放置しないこと、全体を理解できないうちに部分を理解したと思込まないこと」

——課題提出後のメールの中で、全員の訳文が出版品質に近かったと”めずらしく”喜んでくださっていた。山岡さんには「自己満足」や「傲慢」に陥ることを徹底的に戒められた記憶がある。読み返してみても、改めて背筋が伸びた。

●「翻訳者は、『、』『。』にいたるまで、一字一句すべてに責任を持たなくてはいけない」

——この言葉を思い出すたび、翻訳者としての姿勢、責任の重さ、だからこそ感じられる喜びを思う。

●「読者にとって何がベストか、それだけを考えろ」
「（それでも）私の翻訳は100点満点で20点か30点だ。裏を返せば70%、80%の可能性が残されている」「いろんな翻訳があつていい。翻訳にはいろんな可能性がある」

——どこまでも真摯に翻訳の可能性を切り開いてこられた山岡さんならではの言葉だったと感じている。

●「既訳を超えなければ新訳を出す意味がない」
——最初のうちはまず自分で訳してみようとしていたような記憶がある。既訳とどのように向き合うのがよいのか、しばらく試行錯誤していた。既訳の誤訳を正す一方で、既訳にない間違いをしてはならないのだから、本当にハードルが高かったなあと思ながら思う。

●「書く力を養うため、自分に負荷をかけるんだ」
——ダッシュやコロン、セミコロンを用いながら挿入や複文を重ねて達意の文章を構築していくようなミルの文体に接し、文の並びや区切り位置を変えたり、丸括弧で括ったり、どうにか自然な日本語にと毎回頭をひねってもがいた。訳文に苦心の痕が見え歯がゆく感じてくださったのか、めずらしくそんなことを仰った。書くことに限らず全てに言えることなので、どんな立場にあっても忘れずにいたい。

大野一、北川知子、小松香織、竹田純子、森珠恵

原語と訳語の一対一対応批判は翻訳教育の金字塔

私は現在 50 代前半で化学メーカーに在籍し、学術文献情報処理会社に出向して中国人研究者が英語で執筆した学術記事を日本語に翻訳しています。

英語の習得を始めたのは 1990 年代の終わりで 40 歳を目前にした頃ですが、まずやったことは英和辞典、単語集、英検や TOEIC の参考書など英語学習の定番ツールを中心とした学習でした。しかし何か違和感を感じ、実際こうしたお勉強モードでは一定の成果はあっても、使える英語が身につく前に成長が止まってしまうのでした。

そんな時に目にしたのが電気通信大学の酒井邦秀先生の『快読 100 万語！ペーパーバックへの道』（ちくま学芸文庫）でした。非常に新鮮だったのは学校英語や受験英語に正面から批判を加えている事でした。それが実際の英語の世界とズレた小宇宙を形成していることが分かりやすく述べられ、大雑把な理解で良いからストーリー性のある英文を大量に吸収することの大切さを説き、英語を母語としない人向けに編集された Graded Readers と呼ばれる読み物を多読することを薦める内容でした。

早速、酒井先生の学外での多読指導教室の門をたたいたのが 2003 年 1 月で、その後 2 年半ほどの間に約 500 万語の英文を吸収しました。名作ありドキュメンタリーあり絵本ありで本当に面白かった。こうして楽しんでいる間に読解力がついたのか、英字新聞がかなり理解できるようになりました。

山岡洋一さんのお名前は、この多読教室に通っている頃に知ったと思います。経営やビジネス関係のスター翻訳者というイメージでしたが、山岡さんとお近づきになれる契機はありませんでした。

そして、日経新聞の夕刊に「人間発見」という各界で活躍の方が自らの歩みを 5 回シリーズで簡潔に紹介をするコーナーがあり、2007 年 6 月に山岡さんが登場されたのです。「『原語と訳語は一対一で対応させなければいけない』というドグマにこだわっていると、文章の意味が伝わってきません。」との事で、「machine」をいつでも「機械」と訳すのではなく「道具」あたりのほうがしっくりと来る例を挙げていました。また「翻訳書は日本語で意味の通るもの、『著者ならこう書くだらう』というものであるべきです。」との事でした。つまり著者が日本語を知っていたら何と表現しただろうかを考えよ、ということのようでした。

読んでいてぐっと来ました。山岡さんが指摘され

た事を自覚しないでお勉強モードにはまると、使える英語が身につく前に成長が止まってしまうことが分かったからです。そして、こうした見方を何と酒井先生はじめ多くの方から学んだと言うのです。

翌 2008 年春に酒井先生にお会いする機会があり「人間発見」の記事をお見せすると、ご存知なかったようで大変喜んでおられました。そして、山岡さんがシャイな方であるとお聞きして、新聞や雑誌の写真で見るイメージとのギャップに驚いたのを覚えています。

そして山岡さんにお会いできる機会がやってきたのが 2010 年 8 月、「翻訳通信」100 号記念東京セミナーでした。受付のそばの山岡さんを見て、すぐに御本人と分かりました。大変立派な体格なのに確かにシャイな感じの方でした。このとき 1 か月後に関西セミナーも予定されていて、関心のあるテーマが組み込まれていたため、どうやって参加を申し込んだら良いかお尋ねすると、関西大学の染谷泰正先生に相談するよう丁寧に教えて下さいました。東京セミナーは大盛況で、名だたる翻訳者や翻訳関係の学界・マスコミ関係者が馳せ参じたのではないかという感じでした。しかし一番私の印象に残っているのは、シャイな山岡さんが翻訳に限らず人生観などいろいろなことを実に饒舌に語った姿です。今思うと、この時が山岡さんの人生最大の檜舞台だったのかもしれない。そして、関西セミナーにも参加すべく染谷先生に連絡を取ると、山岡さんが私のことを話して下さいたようで本当に有難い事でした。東京セミナーが祝賀ムードだったのに対して、こちらのほうが内容の濃いプログラムが多く、実質的に役立つ話が多く聞けました。

しかし、山岡さんとの出会いがこの 2 回限りでお仕舞いになるとは！ご遺族から逝去を知らせるメールを頂いたときは声も出ませんでした。今私の部屋には「翻訳通信」の第 1 号から最後となった第 111 号までをプリントアウトしてファイルに綴じたものがあります。これほど翻訳や翻訳者を取り巻く環境に思いを寄せて情報を発信した翻訳者がかつていたのでしょうか。また、山岡さんの主張が広く受け入れられ、翻訳の世界は勿論、英語教育までも大きく変えていく矢先であったと思います。山岡さんが切り開くはずだった未来を一体誰が切り開くのだろうか。ついそんなことを考えてしまいます。（終）

夏目漱石「現代日本の開化」と山岡洋一——翻訳の未来に向けて

「甚だお暑いことで、こう暑くては多人数お寄合いになって演説などお聴きになるのは定めしお苦しいだろうと思います。」 1911年8月、和歌山の講演冒頭での夏目漱石です。猛暑の2010年、神楽坂での「翻訳通信」100号記念東京セミナーの8月28日も暑い一日でした。この日を待ち続けた私は、扇子を仰ぎながら99年前の漱石の講演を聴く一聴衆に我が身を重ねていました。

無理ありません。季節もそうですが漱石の講演のテーマは「現代日本の開化」であり、山岡さんのそれは「翻訳の過去・現在・未来」でした。山岡さんは、同じ語句に対して同じ訳語を当てはめる、いわゆる「学者訳」は、原著の論理をつかみ損ねていることを指摘し、原文の意味を日本語の論理に基づいて表現することの重要性を強調しました。と同時に「分かりやすくする」こと自体を目的とすることにも注意を促していたはずです。当日の講演の原稿に加筆された内容が「翻訳通信」2010年10月号の巻頭に載っています。そこでは以下のように力強くお書きになっています。「翻訳者にとって何よりも重要なのは、原著者と原著に対する敬意や熱意、共鳴、共感です。自分はこの本を訳すために生まれてきたのだといえる本、この本の内容を是非とも日本の読者に伝えたいと思える本、そういう本を訳すときに、翻訳者の力が最大限発揮されます。」 当日の講演でここまでおっしゃっていたかどうか記憶が定かではないのですが、少なくとも「翻訳の魅力」が伝わる調子であったことは確かです。

残念ながら、講演に続く立食パーティーで山岡さんとお話しする機会を逸してしまいましたが、数日後、パーティーで名刺をお渡ししてご挨拶させていただいた村井章子さんから私のメールアドレスをお聞きになったという、名翻訳者の名伴走者とも言うべき編集者の黒沢正俊さんからメールをいただきました。それをきっかけに私は、20世紀のアメリカの経済学者フランク・ナイトによる『リスク・不確実性・利潤』の原著の中から、序文の試訳を山岡さんに送ってみたのです。それに対する返信の中で、山岡さんから次のような厳しいお言葉をいただきました。「わたしの正直な感想をいわせていただければ、これでは読者は理解できないだろうというものです。失礼ながら、この原文はこう訳さなければならない

という伝統の重みに悲鳴を上げておられるように読めます。もっと自由に、原文の論理を素直に伝える姿勢をとる方が良い結果になるように思います。」私は、失望しつつも、そこまで正直に感想を伝えてくださる山岡さんのお言葉を有難く感じたのです。それに対する返信の中で、私が昨年1月にインターネットのtwitter上で、経済学の訳語・専門用語について主に経済学者の間で行われたやり取りの記録(<http://togetter.com/li/3803>)をお伝えしました。それに対し、山岡さんからは「感激しています」との更なるご返信をいただき、続けてこうもお書きになってくださいました。「適切な経済学入門書の翻訳でこれができるのなら、是非お手伝いさせていただきたいと考えました。そんな機会があればうれしいのですが。」と。

漱石が「現代日本の開化」の講演において、当時の現代日本の開化を「外発的」なものと看做したことは広く知られています。それになぞらえれば、山岡さんの講演における「学者訳」は「外発的」な翻訳と呼ぶことが出来るでしょう。しかし、漱石と山岡さんとの間には決定的な違いがあります。それは漱石が（三好行雄も述べるように）日本の開化が「内発的」になりうるのかどうかについては一切語っていないのに対し、山岡さんは「内発的」な翻訳を訴え、そして、自ら実践してきたということです。その姿勢は、2006年、光文社古典新訳文庫から出版されたジョン・スチュワート・ミル『自由論』の翻訳における解説、あるいは、山岡さんの手によるものとしては最後となってしまった「翻訳通信」2011年8月号において、明治初期、翻訳者たちが、自らの力で訳語を生み出していった時代の文語訳の素晴らしさを強調していたことにも表われていると思います。山岡さんからお手伝いいただける、いや、こちらがお手伝いさせていただく機会は永遠に失われました。しかし、翻訳者と研究者とが相互に共鳴、共感し、両者の相互交流、そして共同作業を行うことの大切さを伝えてくれた山岡さんの遺志を実現していく道が閉ざされた訳では決してありません。

山岡さん、安らかにお休みください。そして、ご家族や親しいご友人の方々を始め、私のように直接そのお人柄を知ることのなかった者にまでも、どうぞ導きの光を与え続けていってください。

山岡先生追悼文

山岡先生は、一流翻訳者としての顔をお持ちでありながら、私にとっては身近で頼りになる「お父さん」のような存在でした。

私は大学4年次の春に、山岡先生のクラスで翻訳を学び始めました。初回講義の題材は先生ご自身も翻訳なさった『ケインズ説得論集』で、その難解さに圧倒されたのを覚えています。理解できない箇所が多く、特に初めの方は何度も質問に伺いましたが、英語原文の構造や背景知識など、何でも丁寧に答えてくださいました。ある時は、「翻訳は難しいけど、楽しいだろ？もっと頑張って勉強したら、楽しくなるよ」と温かいお言葉を頂きました。この言葉は今でも胸に焼き付いており、翻訳のみならず何か難しいことにチャレンジする際に、心の支えとなっています。

大学卒業後も先生と交流できる場をもちたいと思い、昨年夏ごろに OB 会の結成を計画し始めたのですが、その矢先に先生は急逝されました。まことに残念でなりません。先生のご遺志を継いで、というとおこがましいですが、昨秋に計画通り OB 会を立ち上げました。主に山岡先生の翻訳作品を取り上げ、定期的に勉強会を開催し、参加者一同翻訳の学習に励んでいます。山岡先生の訳文を目にするたび、その美しい日本語に身震いする一方で、「もっと教えるを乞いたかった」と叶わぬ願いに想いを馳せることがしばしばあります。

これからも、先生の教えを胸に、翻訳の勉強を続け、人生を歩んでいきたいです。山岡先生、今までありがとうございました。安らかに眠りください。
(阿部貴史)

昨夏、山岡先生が亡くなられたと友人に知らされたのには甚だ驚きました。私の記憶は2年前、先生の翻訳の講義を受けていた時分に遡りますが、私はその頃の先生の御姿をしか存じておりません。翻訳に対して多大なる情熱をお持ちでその炎は勢いを失わず盛んに燃え立っていました。私には先生の訃報はとても信じられないことでした。それが実感されるようになったのは、やがて『翻訳通信』がふつつり途切れてしまったのを見たときでした。「ああ、

やはり先生は逝ってしまわれたのか」と悲しまずにはいられませんでした。

実に私にとっては『翻訳通信』だけが先生との唯一の繋がりでした。実のところ、私は1年間講義に出席していながら、ついに先生と一度もお話することがありませんでした。その後のお付き合いなどももちろんなく、どうしてあの時にいろいろと話をしておかなかったのだろう、たくさん学べるがあったのではないかと、そればかり悔やまれます。

私は先生と直接に関わることはなかったので先生のお人柄やそれについての思い出やということを書くことはできません。ただ先生について知るところは、『翻訳通信』や講義の最中に垣間見られる翻訳への情熱ばかりです。

先生の訃報の後、私は追憶するように改めて『翻訳通信』を読み返したのですが、よくもあれ程のものをしかも毎月出せたものだと、先生がいかに翻訳に熱心であったか大変に感心していました。尚の事惜しい人を亡くされたと残念に思うばかりです。

先生がまだ御存命であられたならば、と叶わぬ想いばかりが溢れてきます。ここに、謹んでお悔やみ申し上げます。

(山口翔太郎)

先生の青春と共にあった「神戸女学院」への思いから、わが身の実力のなさを恥じ入る気持ちと同時に、温かいお人柄に触れることができ、大学院で受けた中で最も有意義だった講義の1つとなりました。先生よりご指導いただいた「辞書の引き方」、「日本語になりにくい単語の状況に応じた訳し方」は今も肝に銘じております。心よりご冥福をお祈りいたします。(戸部史子)

■神戸女学院で山岡先生の授業を受けたのは、昨年7月だった。事前課題に受講生はみな悲鳴をあげ、授業も噂どおりに厳しかったが、同時に何やら温かく、その後のお茶会も楽しかった。ちょうど夏休み前で、私たちは勉強会の相談をしているところだった。山岡先生が勧めてくださったのが、いい既訳のあるものをまず自分で訳して、お互いの訳や既訳と比較検討するという方法だ。教材候補も挙げていただき、私たちは、本当に少しずつだが、その通りにやってみた。確かにこれは効果的！ 思いがけないところが難しく、既訳はもちろん、仲間の訳文にも発見がある。うれしくなって先生に「やっています！」とお知らせしようかと思いつつ、気恥ずかしく、またの折に申し上げるのを楽しみにしていたのだが…。当然またお会いできると思っていた。もっと学びたかった。だからこそ一度でもご縁を得たことに感謝し、そこで学んだことを大事にしようと思う。

(渡辺玲子)

■山岡先生は、あれほど高名な先生でいらっしやっただにもかかわらず、気さくにお話をしてくださり、かつ熱血指導をしてくださいました。授業では、学生の訳に対して、すぐに模範訳を提示されるのではなく、少しでも良い訳が出るように、根気良く導いてくださったと思います。また、聴講生でも正規受講生と同様に、訳を見てアドバイスをしてくださって、勉強を続けていく上で非常に励みになりました。先生のご指導を受けることができとても光栄でした。本当にありがとうございました。急に旅立ってしまったのが残念でなりません。心よりご冥福をお祈りいたします。(堤和枝)

■私が先生にお会いしたのは、大学院での翻訳の集中講義の際でした。先輩からのお話や事前の課題などから、正直「当日は何を怒られるのだろう」と覚悟して臨みましたが、実際の授業では先生から、厳しいけれどもとても温かみのあるご教示を受けました。また、その際には翻訳に関するだけでなく、昨今の英語教育に対するご意見や、日本での英語教育の歴史など、とても幅広いお話を伺ったことを覚えています。たった1日だけではありましたが、先生に直接ご指導いただいたことは非常に恵まれてい

たと思っています。本当にありがとうございました。(西岡美絵)

■「翻訳って分らないな」と山岡先生は講義の中でおっしゃられていました。何十年経っても分からない翻訳の世界が面白いと思った瞬間でした。(吉本万穂子)

■「翻訳とは物書きの仕事だ」「誤訳は読者への裏切り行為だ」——山岡先生のこの二つのお言葉が、今翻訳をする上で、私にとって大切な言葉になっています。お亡くなりになるわずか一か月前、神戸女学院大学での院生に向けた集中講義でおっしゃった言葉です。私が山岡先生と直接お会いしたのは、この講義を含め、たった二回だけです。しかし、翻訳に対する真摯な態度とその愛には、プロの翻訳家とはこうあるべきなのだ、とそのお言葉の一言一言にハッとさせられました。集中講義での『不思議の国のアリス』を題材にした既訳の比較では、翻訳技法だけではなく、「学ぶ姿勢」を再認識させられ、今の私の翻訳学習に非常に生かされています。今でも先生がお亡くなりになったということが、何だか信じられません。心からご冥福をお祈りすると共に、先生から学ばせていただいたことを胸にしっかり刻み、これからも翻訳に向き合っていきたいと思えます。(増田沙奈)

このテキストを文字通りに解釈すれば、PGEIの一回の服用量は0ミリグラムまで減少せうということになる。通訳者や翻訳者はテキスト中で論じられている条件下で、PGEIの使用を完全にやめてしまうことが理にかなっているか否かについて、判断を下すには必要な知識を皆手合わせていないかもしれないが、気づくべきは、そういう概念を述べるにはこれがやや普通ではない表現であるということである。もっと自然な表現で、たとえば

“... Dans ces cas, on peut se passer de PGEI sans inconvénient.”

「PGEIを服用しなくてもよい」

あるいは

“... Dans ces cas, on peut éliminer la PGEI sans inconvénient”

「PGEIの服用を中止してもよい」

などである。

「・・・まで減らすことができる」という表現の前には、通常小さな値が来るが、ゼロということはない。こうした普通ではない言い回しは、通訳者や翻訳者に疑いの念を生じさせるはずである。これは間違いではないだろうか？ [0ミリグラム]は間違いではないのだろうか？ テキストやスピーチのこれ以外の部分によって、実際0ミリグラムではないということがわかるかもしれないし、この「妥当性の検証」のおかげで、通訳者はエラーを判別して訂正し、その結果著者や読者、通訳を聞いている人々に付加的な価値を提供しうる。

「妥当性の検証」を教えるのに適した起点言語の例を見つければ、いくばくかの時間と手間を要するかもしれないが、「取組ループ」を教える機会を数多くある。学生に翻訳課題を与えれば、言語的に不完全な目的言語を提出してくることがたびたびあるからだ。そういった言語的にぎこちない翻訳を選び出し、それを出した学生に対し、自分の翻訳に納得しているかどうか、質問してみる。もしその学生が納得していないと答えたなら、教師はなぜもっと改善しなかったかと尋ねてみればよい。「時間がなかったか」、「忠実でなくなる」ことをおそれ、それ以上うまく目標言語で再現することが難しかったか、「忠実でなくなる」というような答えが返ってくるかもしれない。教師はそこでクラスの学生に対し、翻訳者の倫理的義務、すなわち通訳者は著者の意に頼るためにテキストを作る、とりわけ言語的に受容可能な目標言語テキストを作るのだということを確認させることができる(第2章)。この義務とは、翻訳の倫理上の質を最大限まであげようという意味である。そのため一つの効果的な方法として、テキストを丹念に調べ、修正を試み、再度テキストを精査、訂正するというやりかたがあるが、これはまさに取組ループの手順そのものなのである。教師はまたこの機会をとらえて、翻訳実践における自身の問題解決法、つまり忠実性の許す範囲にとどまりながらも、起点言語テキストの構成や語句からの逸脱が可能であると「自分が」考える限界を提示できる。プロセス志向教授法(第1章参照)の原則のいくつかに従い、教師は自分の用いる解決法の基準は、少なくとも部分的には自分特有のものであり、他のすべての通訳者と共有できるものとは限らず、したがってそれを唯一の参考モデルとして用いるべきではないということも強調しておくことができる。

5

山岡先生が手を入られた学生の手稿

[山岡さんの神戸女学院大学での講義シラバス]

●2009年度

(この年の翻訳課題は当時、山岡さんが翻訳中だった『ケインズ 説得論集』の「孫の世代の経済的可能性」だった)

1. 概要：一般読者向けに書かれた短い評論を訳してもらい、その結果に基づいて、プロの水準に達するために必要な点を論じていく。翻訳には、英文を読む力、日本語を書く力、内容を理解する力などの総合力が必要である。そして、英文を読む力をはじめとする総合力を獲得するには、翻訳を学び、翻訳を行うのが近道だともいえる。授業ではまず、翻訳の基本中の基本である構文解析の方法と辞書の使い方を学ぶ。つぎに、論理的な文章を訳すために必要な技法を学ぶ。つぎに、翻訳調の既訳を示し、翻訳調からの脱却の方法を学ぶ。
2. 授業の進め方：講義日の3週間ほど前に課題を提示する。課題は2000語強あり、訳文の量では400字×15枚ほどになる。講義日の10日前までに電子メールで課題文の翻訳を提出してもらおう。授業日の3日前ごろまでに参考資料を提示し、当日までに読んでくるよう求める。授業終了後に課題の提出を求める場合がある。
3. 成績評価方法：提出課題（80%）、授業への貢献度（20%）
4. その他：課題の翻訳にあたっては、以下の辞書と文法書のうち、少なくとも一つずつを使うこと。

英和辞典（電子辞書は不可）

ランダムハウス英和大辞典

研究社英和大辞典

ジーニアス英和大辞典

リーダーズ英和辞典

文法書

江川泰一郎著『英文法解説』（金子書房）

安藤貞雄著『現代英文法講義』（開拓社）

安井稔著『英文法総覧』（開拓社）

●2010年度

(この年の翻訳課題は、神戸女学院大学大学院で出版を前提として、教員・学生による翻訳プロジェクトを行っていた Daniel Gile “Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training” の第5章だった)

1. 授業の到達目標及びテーマ：出版品質の英日翻訳を短期間で集中的に学ぶ。
2. 授業概要：出版を目標とする英日翻訳を行ってもらい、その結果に基づいて、出版が可能な水準に達するために必要な点を論じていく。出版が可能な品質を達成するためには、原文の読解が正確であること、原文の内容をしっかりと理解していること、日本語としての質の高い訳文であることが必要である。自分の訳文を読んで、意味が通じにくいところを探し出し、原文の構文解析に間違いがないか、語句の解釈と訳語が正しいか、内容を十分に理解した訳になっているか、適切な日本語になっているかを検討するのが、翻訳の品質を高める早道である。授業では各人の訳の問題点を指摘し、改善の方向を考えていく。

3. 授業計画 4コマ

4. 授業方法：4月後半に課題を提示する。授業日の前に電子メールで課題文の翻訳を提出してもらおう。各人の翻訳の問題点を指摘し、授業前あるいは授業後に改訂を提出するよう求める。授業後に再改訂を求める場合がある。
5. 評価の基準：提出課題（80%）、授業への貢献度（20%）
6. テキスト：プリントなどを配布。
7. 参考書・参考資料など：課題は本の一部であり、翻訳にあたっては事前にその全体を読むことが不可欠である。
翻訳にあたっては、以下の辞書と文法書のうち、少なくとも一つずつを使うこと。
英和辞典（電子辞書は不可）：ランダムハウス英和辞典／研究社英和大辞典／ジーニアス英和大辞典／リーダーズ英和辞典
文法書：江川泰一郎『英文法解説』（金子書房）／安藤貞雄著『現代英文法講義』（開拓社）／安井稔著『英文法総覧』（開拓社）
8. 授業以外の学習方法
9. 留意事項：受講者の翻訳のうち、もっとも優れていたものを出版用に採用する可能性がある。採用された場合、授業後に再々改訂を求める場合がある。

●2011年度

(この年の翻訳および既訳比較課題は『不思議の国のアリス』第1章だった)

1. 授業の到達目標及びテーマ：出版品質の英日翻訳を短期間で集中的に学ぶ。
2. 授業概要：19世紀の英国の小説を訳し、つぎに各自の訳と名訳として定評のある既訳とを比較して、出版水準に達するために必要な点を検討していく。とくに、品詞転換などの翻訳シフトがどのように使われているかをみていく。
3. 授業計画 4コマ
4. 授業方法：4月後半に課題を提示する。授業日の前に電子メールで課題文の翻訳を提出してもらおう。つぎに、何種類かの既訳を示し、とくに名訳として定評のある訳と自分の訳との違いを検討したレポートを提出してもらおう。授業では各自の訳とレポートに基づいて、出版品質の翻訳について考えていく。
5. 評価の基準：提出課題（80%）、授業への貢献度（20%）
6. テキスト：プリントなどを配布。
7. 参考書・参考資料など：翻訳にあたっては、以下の辞書と文法書のうち、少なくとも一つずつを使うこと。
英和辞典（電子辞書は不可）：ランダムハウス英和辞典／研究社英和大辞典／ジーニアス英和大辞典／リーダーズ英和辞典
文法書：江川泰一郎『英文法解説』（金子書房）／安藤貞雄著『現代英文法講義』（開拓社）／安井稔著『英文法総覧』（開拓社）
8. 授業以外の学習方法：名訳のある原著を訳し、自分の訳と名訳を比較するのは翻訳学習の基本といえる方法であり、学習会や独学利用できる。
9. 留意事項

山岡先生の思い出

一昨年7月、山岡先生の集中講義が終わった3日後、一通のメールを受け取った。ジョゼフ・ナイの新刊の翻訳の話がきたので、もし興味があれば共訳という形で検討したいがどうか、とのことだった。

「出版翻訳」という分野があるのは知っていたが、年に1日の集中講義を2回受けただけのわたしと、書店に並ぶ本を翻訳するなんて……にわかには信じ難かった。「下訳のようなものでしょうか。」おずおずとメールで尋ねたところ、すぐに返事がきた。

「共訳というのは基本的に文字通りの共訳です。2人で分担を決めて、1章終わるごとに共訳者のチェックを受けます。(…)共訳者なので、わたしの担当部分についても、コメントや修正候補の提示を求めます。」「無謀」という二文字が頭をよぎったが、国際政治を多少なりとも学んできたわたしにとって、関心をよせてきたナイの新刊を山岡先生と共訳できる魅力には抗えなかった。常々「翻訳は楽しいよ。こんな楽しい仕事はないよ。」と仰っていた先生であったが、いざ共訳作業が始まると、当然ながらわたしにはプレッシャーの連続だった。「難しいです～」と泣きごとをいうわたしに「うん、難しい。いや～、ほんと、難しいよ。」しかし声はどこか弾んでいて、先生にとっては難しさも楽しさの一部のようだった。褒めてもらった、という記憶はほとんどない。唯一、褒め言葉とともれたのは、共訳終了後の感想を尋ねられ「いや～、根性あるよ……」。そして、ねぎらいの言葉のおつもりだろうか、ぼそっと仰った。「日本一難しい翻訳家と組むことになっちゃったね」。そして、ナイの新作『スマート・パワー』は当初の予定通り7月に出版された。出版されてほっとしたのもつかの間、さっそく電話である。「次は単独訳で。修士論文はいつ終わるの」「来年の3月には」「……そんなにかかるのかあ……」少し急いでおられるようだった。一方、時間はまだまだ無限にあると思いついていたわたしであった。

それから1か月もしない夏の日、先生は突然に逝ってしまわれた。これからもずっとご指導を頂けると信じて疑わなかった。翻訳家としても、教育者としても、これからますますご活躍されるはずであった。杳然としながら、何で、という言葉だけが何度も口をついてでた。ライフワークである古典の名著の翻訳にも、さらに意欲を見せておられた先生であった。わたしも、先生の翻訳による『真説 アダム・スミス』を読み「『道徳情操論』を、ぜひ山岡先生の訳で読みたいですー」とリクエストしたところ、

こんなメールが届いた。「『道徳情操論』はひょっとすると今の時代にあっているのではないかと考えています。いずれにせよ、経済から倫理や歴史などに対象を移していくのが良いだろうと考えていますので。」残念ながら、これら分野の名著を先生の翻訳で読む機会は永遠に失われてしまった。

また、翻訳半ばで遺されてしまった、ポール・ジョンソン著の『チャーチル伝』への思いを語られていたのも忘れ難い。先生はチャーチルに特別な関心を寄せておられるようだった。「これが終わったら、もう1冊、もう少しページ数のある、別のチャーチルの本があるので、何人かで共訳できればと思ってるんだよね……」混迷する日本や世界の状況を憂いつつ、これからのリーダーシップを考える上で、今こそチャーチルの伝記が広く読まれるべきと考えられたのではないだろうか。先生の翻訳による「チャーチル伝」、わたしも読むのを心待ちにしていたのだが、未完となってしまったこと、残念でならない。

授業や共訳作業を通じ、先生から常に伝わってきたのは、翻訳という仕事への誇りと愛情、そして、教えることへの情熱であった。常に探求を続けつつ、持てるものすべてを惜しみなく与える方でもあった。翻訳を自らに与えられた天職として、そのことに感謝する山岡先生が、眩しいほどに羨ましかった。

共訳が決まる直前、山岡先生から届いたメールの最後にはこう書かれていた。「翻訳権がとれて、共訳が決まったら、その段階から『先生』は止めてください。共訳者は共訳者ですから上下関係はありません。互いに遠慮なく意見を言いあう関係でなくともうまくいきません。」結局、最後まで「山岡さん」と呼ぶことはできなかったが、いま思えば、先生がこの言葉に込めたのは、立場を問わず、翻訳に携わる人間に求められる覚悟と責任であったのだろう。……とはいえ、やはりわたしにとってはいつまでも「山岡先生」である。先生に教えて頂いたことは数限りなくあるが、何といても思い出すのは先生の飾らないお人柄と、その存在の温かさである。電話から響く「もしもーし……」という優しい声をもう聴けないこと、今年の夏にはもうお目にかかれなことを思うと、あらためて寂しさがこみ上げる。しかし、どこまでも面倒見のよい先生のこと、きっとどこかでわれわれ教え子を見守ってくださっていることだろう。厳しくも温かいご指導に思いを馳せるにつけ、感謝の思いは尽きることがない。